The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒『華胥囈語』翻刻・解説
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2005, 2005, p. 31-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００５　（大阪大学大学院文学研究科・文学部　懐徳堂センター　二〇〇五年二月二八日発行）

中井履軒『華胥囈語』翻刻・解説

湯城吉信

解説

『華胥囈語』は中井履軒の和文集である。手稿本は十八篇の文章を、『履軒先生和文集』本は全二十篇（末尾に手稿本未収の二篇を付す）を収める。

書名の「囈」は「うわごと」「寝言」の意。履軒の漢詩集『枕上雑題』序（一七八五）にも「夫夢後眼未開、実与夢為隣、則雖曰囈語可也」とある。「華胥囈語」とは、華胥国という夢の中での寝言（たわごと）を意味すると思われる。実際、三「華胥国記」、一一「夢路草枕」、一六「ねのひ」は夢に関わる話である。『懐徳堂文庫図書目録』に「華胥国囈語」とあるのは誤りである。また、『国書総目録』は『華胥国物語』の項に含めている（『華胥国物語』の別名として扱っているのであろう）が、両者は別物である。

履軒は安永七年（一七八一）、米屋町に引っ越し、居宅を華胥国と名づけた。華胥国とは『列子』に見える、古代の理想国である（三「華胥国記」参照）。『華胥囈語』は自らの想像世界（夢の世界）華胥国で履軒が何を考えていたのかを窺うことのできる貴重な資料である。

内容は、歌論、創作、考証、経世論など多岐に渉る。特に、文芸関係の文章が多いことが注目される。履軒の和文については経世論はすでにいくつかが翻刻または影印されている。すなわち、『年成録』『華胥国物語』＊『浚河茅議』『均田茅議』は『日本経済叢書』一六巻及び『日本経済大典』二三巻（上記書目以外に『恤刑茅議』『攘斥茅議』も）に翻刻され、『老婆心』は『懐徳』二〇号に翻刻され、『有間星』『遺草合巻』『越俎弄筆』などが『華胥国物語』（懐徳堂文庫復刻叢書三）に影印されている。しかし、文芸関係は『百首贅贅』が翻刻されているに過ぎない（福島理子、徳原茂実『百首贅々・百人一首夷雲』和泉書院（百人一首注釈書叢刊））。以上のような現状に鑑み、本稿では、『華胥囈語』の翻刻を試みた。

＊『華胥国物語』は本来文芸作品に分類すべきだが、理想社会を述べたものであるため経世論と見なされている。

テキストは、手稿本、『履軒先生和文集』本、大阪府立中之島図書館本の三本が確認できる。手稿本は、一「独ふね」から八「巴歌集序」までは整った字で毎葉きっちり九行に書かれており、清書だと思われるが、九「ふきのことば」以降は推敲の跡が多く字も乱れ行数も不定（十～十三行）で、草稿だと思われる。『履軒先生和文集』本（以下、和文集本）は、抄者未詳の写本で、前述のように、手稿本にない二篇を末尾に収める。文脈を考え手稿本の間違いを訂正している箇所もあり解読の参考になるが、手稿本の仮名を漢字に直すなど、手稿本と異なる部分もあるので注意が必要である。一方、中之島図書館本（以下、中之島本）も、抄者未詳の写本（中之島図書館には同一抄者によると見られる抄本が多数見られる。装丁などから明治以降の抄だと思われる）。収録する文章は手稿本に同じ。漢字が崩れてい

ないので字の判読の助けになる。手稿本を忠実に写そうとする姿勢は評価できるが、意味を理解せずに形だけ写していると思われる箇所があるので注意が必要である。

翻字は、現代通用の仮名・漢字に改め、適宜濁点を施した。また、台詞には「　」を施し、適宜段落を分けた。仮名遣いは原文のままであるが、「ミ」「ハ」「也」「哉」は「み」「は」「なり」「かな」に直し、踊り字（「〻」「く」）はひらがなに直した。漢字を当てはめられるものには、該当箇所の右に（　）付きで表示した。本文にない振り仮名も、（　）付きで表示した。

目次

一、独ふね（京都行を題材にした随想）　32頁
二、よこなまり（なまりについての考証）　36頁
三、華胥国記（華胥国についての記）　37頁
四、題三夕図（三夕の歌を題材にした絵への題辞）　40頁
五、ましらのいざらひ（適わぬ恋を題材にした歌物語）　41頁
六、与竹里翁（『古今集』校訂に関する加藤景範あての書状）　43頁
七、世のたから（物の値段についての論、『遺草合巻』一二に同じ）　43頁
八、巴歌集序（巴歌集（未詳）の序）　45頁
九、ふきのことば（蕗についての考証）　46頁
一〇、歌のすがた（歌論、古ぶりを評価する）　48頁
一一、夢路草枕（夢での東国行を題材にした歌物語、富士の考証が詳しい）　49頁
一二、しのぶ摺（しのぶ草についての考証）　56頁
一三、しがらみ（恋物語、履軒の女性観が窺える）　58頁
一四、くれなゐ（恋物語、迷信を暴く）　63頁
一五、長き夜（随想、履軒の晩年の悩みが窺える）　65頁
一六、ねのひ（子の日の夜見た夢を題材にした歌物語）　66頁
一七、歌のすがた（歌論、各勅撰集についての考え、かすめ歌についての論など）　68頁
一八、かすめ歌（歌論に歌物語を付す）　74頁
一九、百首考（『百人一首』の成立についての論、『百首贅贅』所収）　75頁
二〇、破腹巻記（粗末な鎧を子孫に遺す理由を書いた記）　79頁

一、独ふね

＊妻の実家である京都の革嶋家訪問を題材にした随想。妻と子供が亡くなったことも見えることから、おそらくは安永四年（一七七五）頃の作であろう。注参照。

難波津やよし（葭芦）＊あし（境）のさかひに心とまるにしもあらねど、身をうき（浮）草のながれ（流）よる大江の岸にみやこ（都）のかた（方）のゆかしきおりおり（折々）は雪にも花にも剡渓の棹＊をわたく（私）しものにしけるを、身のさちすくなく（幸）（少）て、めこみたり（妻子）（三人）＊うちつづき（続）＊うせ（失）けるうきとし（年）月を隙の駒＊にことづてやりぬ。さるは四年あまり（余）まうのぼら（上）ですごし（過）＊ぬ。

かのゆかりなる河島にすめるがかたにるうのことありて、卯月の廿八日の夜、河舟してのぼりぬ。処せく人おほき船なりければ、苫の下にうつぶして身じろぎもせであかしぬ。よもすがら聞こととては、難波のわざをきのよかるあしかる、しづのめおの身を淵に沈めたる、刃にかかりたる、など耳をぞあらはまほしき。淀のわたりすぐるころ、子規の一声おとづれたるに「聞つや」とかたらひあはすべき友だになければ、

一声は　あなおぼつかな　梶枕
　　船のうちさへ　独身にして

ふしみにあがりて、小枝・鳥羽をへて、河島にゆく。かのゆかりの翁さへこの春の比身まかりぬとききたれば、あふさきるさに思ひまどひて道すがら、

久かたの　桂の里に　きてみれば
　　月は小倉の　峰にかくれて

ゆきいたりて門にさしいりてみるに旅のてうどときちらしてすさめくおのこらたちやすらひたる。「たれにか」とおもひつつうちにいれば、まろうどのおきなとくみとがめて「難波のせんしやうこそ出きにけれ。われはまだみしらねど、さばかりの人にこそあれ」とおどろかせば、あるじ立出て「さにこそ」とて、ついゐて、うさつらさ世のはかなさなどまねびいづるを、かのまろうど「おそしおそし」とざめけるほどに、ひさしかたにまいりぬたにはにすめるゆかりのおきなにてぞありける。ひと年丹波にいきたりし人々はみな相しれりけるを、この翁なん、その時しも旅にてあらず。めづらしとうちかたらふに、翁の妻もさかづきとりて「庭なる筆おれい給(ゐ?)すすめよ」などののしる。

とかくするほどに「日やかたぶきぬらん」とまろうどはいでたつを門のほとりまでみおくらんとするを、「いざたまへ」とふたりして手をとりてゆく。「いなや、けふゆかば、うきことのあらんを」といふを、「老の坂をこゆるばかりをいまだわかき人のなでうきことのある

べき」とせちにそそのかすに、さすがゆかしき心さへそひて道すがら何くれとかたらひつつ亀山にいたる。

翁、門の外より「めづらげなるまろうどみせむ」とののしりつついるに家のうちこぞりておどろきまどひて、舌とにものうちいふ。そがなかに、ひとりのをうなのふしめにてものいはぬはうせにしものの妹なりけり。このあたりにすみつきたる。このごろここにきたれるなめり。うきことのかぎりとひもやらでただうちなみだぐみたる。さらでだに野べのゆかりのいかで草葉に露をかざらん。まいてかのわすれがたみの撫子さへかれはてにたれば、めいぼくなき心ちさへそひてしばしはものいはでありぬ。「かのうきことといへるはこれにこそ」と翁も思ひあはすらめ。

「けふこのたびのかへるさ、みやこにて高辻すがはらの君の御もとにまいりたる。けふなんうちに」といふ。かへり路のいそぎありてあすくだらんとすなる、月ごろ思ひまうけしことのたがひたるをうちなげきて、侍ところの柱にかいつけて帰りける。

あひみまく　ほしのやどりの　遠ければ
そらになくなり　山ほととぎす

このほかのことはれいのからさえずりなれば、わづらはしくてもらしつ。

【校異】○うちつづき…和文集本「うちつかき」に見える。○のぼらで…和文集本「のぼらず」。○しづのめお…中之島本「しらめお」に見える。○あなおぼつかな…手稿本は「それかあらぬか」を見せ消ちにして「あなおぼつかな」に直す。○ゆきいたりて…中之島本「ゆきいたり」。○門…中之島本「川」。○つらさ…中之島本「つらせ」。○かのまろうど…和文集本「ろ」の横に「ら」と振る。○まろうど…和文集本「ろ」の横に「ら」と振る。○たには…和文集本「た」を見せ消ちにして「に」に直す。○かたらふ…中之島本「かたろふ」。○門…中之島本「川」。○うき…中之島本「かき」。○月ごろ…中之島本「月こそ」。○かいつけて…中之島本「はいつけて」。

【語釈】○よしあし…葭芦に善し悪しを掛ける。○わざをき…役者。俳優。○あふさきるさに…あれやこれや。○まろうど…客人。○ついゐて…坐って。○まねび…ここでは、語るの意。○からさえずり…唐囀り。漢文のこと。

【注】○剡渓の棹…剡は音「せん」。興に乗じて訪問することを言う。王子猷が戴安道に会いたいと思い、雪の夜に船を出し剡渓の彼の家の前まで来たが、興が尽きたので会わずに帰ったという故事が『世説新語』任誕篇に見える。履軒著『洛汭奚嚢』所収(『履軒古風』巻二にも所収)の「丙戌仲冬、将北入京、飲別諸友」と題する詩「此別非遠別、何事意惆々、雪裏若相思、長江一夜棹」の転句、結句もこの故事を前提として作られたものであろう。○めこみたり…妻子三人。履軒は、宝暦十三年(一七六三)に結婚し、明和二年(一七六五)に男子を持った。だが、男子は明和四年(一七六七)までに亡くなり、その後得た娘の鹿も明和八年(一七七二)に、さらに夫人みわを安永二年(一七七三)に二十七歳の若さで失った。さらに、安永四年(一七七五)にはみわの忘れ形見の八郎を亡くしている(加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九三、二〇〇頁参照)。ここでの三人とは明和八年以降に亡くなった三人を言うのであろう。○隙の駒…馬が隙間を通り過ぎる。時間が過ぎるのが早いことを喩える。『荘子』知北遊篇に「人生天地之間、若白駒過隙、忽然而已」と見える。○かのゆかりなる河島…革嶋家のこと。革嶋家は、竹山、履軒の妻の実家。明和元年(一七六四)、岳父が亡くなった際、跡継ぎが幼かったため、竹山が後見人として一年間滞在したこともある。○一声はあなおぼつかな…「ひとこゑのおぼつかなさに郭公われもききつといふ人もがな」(『続拾遺集』一六二)、「過ぎぬるが山時鳥一こゑのおぼつかなさもはれぬ雲ゐに」(『新続古今集』二五九)参照。○たには…丹波。革嶋家は丹波にも土地を持っていた(『国史大辞典』)。○うせにしもの…亡せにし者。安永二年(一七七三)に亡くなった夫人みわのこと。○撫子…撫でし子で、愛児、または愛した女性の意。ここで撫子は、安永四年(一七七五)に亡くなったみわの忘れ形見の八郎を指していると思われる。他、履軒は、子供に対する砂糖の害を力説する『老婆心』で、「さきくありてわが国におふるなでしこにあはれをかけよ春の雨露」という和歌を詠んでいる。その他、履軒の和歌集『越吟』第二に「妻をうしなへるころ、たかさと(竹里)の翁の歌よみておこせたるかへし」という詞書きのもと「かつみてもなぐさむことは撫子の花にぞ露はをきまさりぬる」(一七八)という歌を詠んでいる。撫子の「なで」に「無で」を掛けていると思われるが、この撫子は妻を暗示するものであろう。○老の坂…老の坂峠。丹波に通じる重要な地点。履軒も歳の老いと掛けて「老の坂のぼらん君が為にとて雪うちはらひきりし杖ぶり」(『越吟』第三、七〇三)と詠んでいる。○亀山…今の京都の嵯峨辺りの地名。○高辻すがはらの君…公家の高辻胤長のこと。菅原道真の後裔。高辻家には革嶋家が代々仕えていた。履軒は明和三年(一七六六)から一年間、賓師に招かれた。○あひみまくほしのやどりの…「ほし」は星を掛ける。「天の原ふるさけみれば七夕の星のやどりに霧立ちわたる」(『新千載集』三三二)では「星のやどり」は星座を表し、「あひ見まくほしは数なくありながら人に月なみ惑ひこそすれ」(『古今集』一〇二九)では「星」と「欲し」を掛け、程度の甚だしいことを表現する。履軒の歌では、「ほしのやどり」により、大阪の遠いことと、高辻卿に会いたい気持ちの強いことを表現していると思われる。

【解説】明和三年(一七六六)から四年にかけての履軒の京都行がどのようなものであったかについては、湯城吉信「『洛汭奚嚢』—中井履軒の京都行」(『懐徳堂センター報』二〇〇四)を参照のこと。

二、よこなまり

＊ 言葉の訛りに関する考証。都人も訛ることがあるとする。

言葉のよこなまりてふことは下ざまの人、遠つ国はさらなり、みやこのうちうへがうへまでも世にしたがひ、ことにふれてあるべし。紫宸を「ししゐ」と読み、冷泉を「れいぜい」と読むたぐひをよみくせとなんいひけらし。されどまことはよこなまりなるべし。

草の名を「あふひ」とかければ、いにしへは文字のままに「逢日」とよみけらし。されば歌にも人にあふべき日を葵によせてよめり。＊今の世にては「青井」のごとよめれば「逢」によることばにあらず。ある人のいへらく、口にては「青井」とよめども文字に「あふひ」とかく故に「逢日」のことをよすると。かかるひがことこそあれ。そもそも歌とは、うちあけてうたふものなり。それをかいつけてまきたたみするははかせのわたくしごとよりおこれり。ある人のいへるごとくならば、あめつちも鬼神もまきたたみたるはかせの文を手にとらでは、かむじうごかむことといとかたしや。されば、「青井」とよむことよこなまりにあらずや。

また「おもひの畑」などいにしへは＊「面火」とよみけらし。今のごと「面井」とよめらば、これもまた畑のたよりあらじ。およそ「ひ」もじ「い」にかよひ、「ふ」もじ「を」にかよふたぐひ、皆みなよこなまりなるべし。

畑草をのむてふことを播磨＊の人は「すふ」といへり。都人ら聞とがめて「いなか人は畑草をすふとなんいふ」とて指さしてわらへば、このいなかうど腹たちて「すふ故にこそすふとはいふなれ。いでや畑管の嘴をのみくちとはいはでなどすひくちとはいふぞ」といへりければ、都人まけにけり。すべてよき人のいへらんことはたがひたるもめでたきになむ、世のありさまにこそ。

＊ 以下、双行注。手稿本では白石の話は書脳(のど)に、日向の話は末尾にある。和文集本は両者とも末尾にまとめる。中之島本は前者を「いにしへは」と「面火とよみけらし」の間に挟む。(意味を理解しないまま原文をその

まま写そうとする中之島本の特徴が見える。）

白石「答澹泊書」*曰、「昔公用にて琉球の人に度々出合候き。此国はふるきものに候。*南倭に有之候へば、本邦の古語もかれこれ遺り聞ゆることに候。大の字をヲホと呼候てヲヲとは不申候。*鶯などをもウグヒスとよび候て、ウグキスとは不申候。*これらのことば(言葉)古来のかな(仮名)づけといまよび(今)(呼)候との違候事、*不審に存候所、こなたにては語転訛し候故のこと、琉球には*昔のままの語と聞え申候。*琉球を南倭と申候事、『山海経』*の南北倭の事に付、先年『南北倭志』*を撰述候事に候。」

日向国飯飽の人のことば(言葉)に今も人名の「次」の字、「治」の字をよみ(読)かへてよぶ(呼)なり。「次」は「し」のかな(仮名)、「治」は「ち」のかな(仮名)、濁りてよべ(呼)ども明か(あきら)にわかるなり。

【校異】○「おもひの烟」などいにしへは…中之島本はこの後に双行注(白石の分だけ)がある。○候…『新井白石全集』五「て」。○ヲヲとは不申候…『新井白石全集』五「ヲヲとは申さず候」。○鶯など…中之島本「など」なし。○ウグヒス…『新井白石全集』五「ウグイス」。○ウグキスとは不申候…『新井白石全集』五「ウグキスとは申さず候也」。○かなづけ…『新井白石全集』五「かなづけ候」。○事…『新井白石全集』五なし。○所…『新井白石全集』五「処」。○には…『新井白石全集』五「にて」○南倭と申候事…『新井白石全集』五「南倭と申候事は」。

【注】○葵…九「ふきのことば」参照。○播磨…中井家は大阪に来る前、龍野におり、竹山や履軒も何度か龍野を訪れている。そのような事情から、播磨の言葉には詳しかったと思われる。○あふべき日を葵によせてよめり…「ゆき帰る八十氏人の玉かずらかけてぞたのむあふひてふ名は」(『後撰集』一六一)、「我こそや見ぬ人恋ふる病ひすれあふひならでは止む薬なし」(『拾遺集』六六五)参照。履軒自身、「神山のおくの岩ねのあふ日草山賤にのみあふはあふかな」という歌を詠んでいる(『越吟』第一、五一)。○あめつちも鬼神も〜かむじうごかむ…『詩経』大序に「動天地、感鬼神、莫近於詩」とあり、それを踏まえて『古今集』仮名序にも「天地(あめつち)を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、…は、歌なり」とある。○白石「答澹泊書」…『新井白石全集』五、国書刊行会、一九〇六、三〇九頁「白石手簡」に見える。○『山海経』…中国古代の神話と地理の書。巻十二「海内地経」に倭が見える。○『南北倭志』…未詳。『国書総目録』に見えない。

三、華胥国記

＊ 華胥国の様子を表した記。履軒は安永九年(一七八一)(本文から冬らしいことがわかる)、米屋町に引っ越し、居宅を華胥国と名づけた。華胥国とは『列子』黄帝篇に見える、黄帝が夢で遊んだとされる無為自然の理想国。なお、『弊帚続編』に漢文の「華胥国記」がある。こちらは居宅の具体的描写がなく簡潔。

いにしへの大江の岸のわたりにかたつぶりのかくれがをわがものがほにすめるは、安永のみかどの季のとしになむ。この小路をよねてふ名たてすめれど、あらぬことにて、まことは南の本となん。されど、笠置の帝の御夢のうらにはあらざりけらし。

よもぎのとぼそいとせばく、藜藿のおひいづべきくまだになし。とよりみれば、人のすむべくもあらずかし。されど、おくはややふくらかになむ。北おもての格子あけて文みる窓とさだめつ。蔦かつらはひわたるばかりの庭もせなれど、もとすみける人の植置たる松梅やまぶきなど、そこらしどけなきものから、此君なくてはひと日しもとて、やをら植たれど、冬の半なれば、みどりの髪も霜とふりつつ、千年のちぎりそらごととなりぬ。

北山にすめる友人の牡丹、卯の花とてをくりたるはあけの年のきさらぎなりければ、よくありつきて、ほどもなく牡丹はさきにけり。卯月のもちはすぐれど、うの花はいまだいぎたなきをうちわびつつ立やすらふ夕暮に雲井はるかに一声おとずれければ、

まつとしも あらで植にし 卯花の
ひもとかぬまに ほととぎすなく

さて日ごろへて咲いて、たるあらぬ物にぞありける。うたて世中にかかるためしのおほかるをおもひつづけてそれとはなくて、

わすれ草 たねまきつれど 春雨に
おほるものとは 鬼のしごくさ

その東のすみに方丈のむろあり。いまやうのもてあそびなる茶室なりけり。この道はたどりしらぬことなればゑしもてはやさず。それながらにて昼のめんざうとさだめつ。かの趙盾のうるさきをここにのがれむためならし。さればかくれすむ山のおく山にや。卯月のはじめより時々はこころみにとてものするもあしくはあらずかし。

ここの北むき(向)*の窓のうへ(上)に額うちて羲上窓*といふ文字をしらつち(白土)にてつくり(作)。窓よりさしのぞき(覗)てみれば東へりのまがき(籬)の下に白菊ひとむら(一叢)ふたむら(二叢)植へわたし(渡)たる、いとこころ(心)にくし(憎)や。

この室のいりぐち(入口)に「華胥国門」といふ額*うちたり。「これは」とみる(見)人ごとに「あやし*。かかるちい(小)さき国やはある」といふ(言)。こたへて(答)いへ(言)らく「かの軒轅*のみかど(帝)の夢のうち(中)に遊びたまひしはここにこそ。夢のうち(中)に大小のけぢめはあらじものを」と。また酒のみ(飲)などしける時はこの国のあるじ(主)かほ(顔)に胡蝶の夢*もさめ(覚)やらず、南の枝*ぞすみかなどいまやう(今様)めかひてものぐるほしう、まひうた(舞歌)ひける。もとより夢てふものはさだ(定)かならぬたとひ(例)にさへいふ(言)なる。すべてこのむろ(室)にいりて(入)*この窓の下におれば(居)、いふ(言)ことすることゆめ(夢)ならぬことはあらじ。

かくかい(書)つけて「華胥国の記」と名づくるもおなじ(同)く夢にこそ。

くつのきのふかうど(履軒幽人)夢のうち(中)にしるす(記)。

このとしのくれ(年暮)にや、この国あるじ(主)のよめりける(詠)歌。

夢のうち(中)に　時しもわかぬ(分)　わが国(我)も
春を隣の　鶯の声

あけのとし(明年)のはじめ(初)に、
あきつすに(秋津洲)*　春やきぬ(来)らし　草枕
夢路かすみて　けさはみ(今朝見)ゆらむ

【校異】○安永のみかど…中之島本目「安永のこかど」。○南の本…中之島本「南の花」。○そこら…中之島本「そこそ」。○やをら…中之島本「やをに」。○そらごと(空事)…中之島本「ろうこと」?に見える。○北むき…中之島本「ふむき」。○あやし…中之島本「おやし」?に見える。○いりて…中之島本「いりし事」?に見える。○けさは…中之島本「けさの」。

【語釈】○そこら…はなはだ。○しどけなき…整わない。○いぎたなき…咲いていない。○ひもとかぬ…つぼみが開かない。○鬼のしごくさ…鬼の醜草。『万葉集』の「鬼(しこ)の醜草」の誤読から生まれた語。紫苑のことも言うが、ここでは雑草の意か。○あきつす…秋津洲。日本のこと。

【注】○かたつぶり…ヤドカリのように居所を定めないことを言う。履軒は「おきふしを心にまかす蝸牛のやがてけぬべき世にしあるものを」という歌を詠んでいる(『越吟』第二、三三五)。また「家なくしてかたつむりをかりてすめることよと笑ふ人ありければ」という詞書きも見える(『越吟』題三、八一一)。一方、『荘子』の「蝸牛角上の争い」の故事を踏まえ、

浮き世であくせく生きることを皮肉る意もあると考えられる。履軒の漢詩「蝸牛巨図」は、華胥国王が蝸牛の大きさを称え、蝸牛角上の二国を訪問するという内容である（『履軒古風』巻四）。○よね…米屋町のこと。○南の本…米屋町の別名、南本町のこと。○此君なくてはひと日しも…此君は竹のこと。王徽之が居宅に竹を植えて「何ぞ一日も此の君無かるべきや（どうして一日もこのお方がなくておられようか）」と言った故事（『晋書』王徽之伝）に基づく。○笠置の帝の御夢のうら…「笠置の帝」とは後醍醐天皇。南北朝時代、笠置山には後醍醐天皇の行在所があった。後醍醐天皇が楠を暗示する「南の枝」の夢を見た話が『太平記』巻三に見える。○趙盾…『春秋左氏伝』宣公二年の条に、趙盾が主君の霊公の贅沢や遊興を諫めて疎まれた話が見える。○かくれすむ山のおく山…「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」（藤原俊成、『百人一首』）などを踏まえると思われる。○羲上窓…羲皇上人で伝説の皇帝伏羲のさらに先の皇帝。世事を忘れて安逸に世を送る者に喩える。○「華胥国門」の額…懐徳堂文庫には「華胥国門」の額が残されている（『懐徳堂事典』一〇一頁、『中井竹山・中井履軒』二一二頁に写真あり）。○軒轅のみかど…軒轅は伝説の皇帝黄帝の名。○胡蝶の夢…『荘子』斉物論篇に見える故事。荘子は夢で蝶になり、覚めた時、人が夢を見ていたのか、蝶が人の夢を見ているのか分からなかったという話。○南の枝…唐代伝奇「南柯太守伝」を指すか。柯は枝の意味。夢の中で、蟻の国の若殿様となった男が南柯国を治める。目覚めて南の枝の下を掘ったら、蟻の巣があり見覚えのある景色だった、という話。『華胥国物語』の舞台設定も華胥国の南柯郡になっている。

【解説】履軒の庭園に関する文章に「小園記」「小園序」（ともに『弊帚』所収）がある。宝暦九年（一七五九）、門人が懐徳堂の庭を造成した事情を述べる文章である。

四、題三夕図*

＊三夕の歌を題材にした絵への題辞。履軒の視点が興味深い（解説参照）。

春ののどけさを鳥にうたはせ（歌）、秋のあはれを虫になげ（嘆）かするはあめのみかど（天帝）のはからひかも。されば世々を（経）へて秋の夕てふやまと（大和）哥（うた）*は浜のまさご（真砂）*のよみ（詠）つくす（尽）べうもあらねど、深草や露けきむし（虫）のね（音）にかよひたるはいとまれ（稀）にこそ。

ただこの三人*のみぞひだたくみ（飛騨匠）のをの（斧）のあと（跡）もなく野べのちぐさ（千草）のおのづから（自）おひ（生）出たらんやうにて、その声なむまこと（実）にむし（虫）なりけらし。むべおほ（多）くの中よりゑらび（選）いだ（出）されけめ。

かくいひ（言）もてゆけば、ひとへにうべなきやう*なれど、そも人にして虫*ならんはあながちにねがふ（願）べきやは。いまのよはいふかひ（甲斐）なし。末遠き後の世（世）のみぞ人はいま（今）のよはいふかひ（甲斐）なし。末遠き後の世のみぞ人ははかられね*。

たぞやむしのねぐらをたちはなれて天雲のたな引わたりて入日のひかりにそのいろいろをそめいたし、嶺たかみ松ふく風の秋のしらべをかきならしたらんは、虫もやさしとくちふたぎてかくれまどひなんかし。それはたありや、あらずや。

【校異】○哥…中之島本「歌」。○三人…和文集本は右に「哥」と振る。○虫…和文集本「むし」。

【語釈】○うべなき…最上の。○やさし…遠慮して。

【注】○三夕…『新古今集』に見える秋の夕べを題材にした三首の歌。「さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮」(寂蓮)、「心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ沢の秋の夕ぐれ」(西行)、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ」(藤原定家)。○浜のまさご…『古今集』仮名序に「わが恋はよむとも尽きじ有磯海の浜の真砂はよみつくすとも」という歌があるのを参照。○いまのよ云々…未来を予想するものか。○天雲のたな引わたりて…「天雲たなびくまで生ひのぼれるごとくに、この歌も、かくのごとくなるべし」(『古今集』仮名序)を踏まえるか。

【解説】魂の飛翔

履軒は自然科学に興味を持ち、天文学者麻田剛立と交流し『天経或問』に訂正などを書き入れたり(『天経或問離題』)、木村兼葭堂の門下に顕微鏡を見に行き「顕微鏡記」を著したりした(『弊帚続編』)。一方、華胥国に代表されるように夢の世界に心を馳せた。自然科学への興味と夢の世界への興味とに共通するのは、その自由自在な「視点の移動」である。すなわち、ある時は、微小な世界に心を馳せ(「顕微鏡記」)、ある時は巨大な世界に心を馳せた(履軒の漢詩集『履軒古風』巻四には、天を飛翔する夢を描いた「会虞—観天地第一」なる創作もある)。ここで、虫の視点を問題にするのもその一例と言えようか。

五、ましらのいざらひ*

＊適わぬ恋を題材にした歌物語。題の「ましら」は猿、「いざらひ」は稽古の意。猿まねの下手な作品だと卑下しているのであろう。

昔かたりなどはみなあらぬことを筆のすさみにかきつらねたるをいまの世しもいかでつくりいでざらんと人のいへりければ戯れに、

むかしおとこありけり。かりそめによばひわたりたる女の日比ふるほどにかたみにへだてなく思ひなりぬ。おやなん聞つけて「げすなり」とていみじうせい

しける。関守かどかどしくたち(立)ふさがりければ、ゑいか(行)で*ありける。風のたより(便)につけて、かくなむ。

かよひ(通)なれし(慣)　宿はさながら*　ちか(近)けれど*
人は雲井に　遠ざか(離)りぬる

をんな(女)か(返)へし。

白雲の　よそ(外)にもわれ(我)は　思ひわび(侘)
くゆる(燻)烈を　それとし(知)らなん

ほどへ(経)て、いひ(言)おこ(遣)せける。親のしゐ(強)て人にあはすなる。「こよひ(今宵)なん、しかあるべき」とてかな(悲)しきことのかぎり(限)、しどけなくかき(書)つづけておく(奥)に、

世中に　かかるうき(憂・浮)身の　ありそ(荒磯・有りぞ)海と*
しらでや人の　恨みはつら(果)ん*

おとこ(男)かぎり(限)なうあはれ(哀)におぼえて、

世の海を　なにか(何)うらみ(恨)ん　数ならぬ
身をしる(知)雨ぞ　はる(晴)る時なき

夜ふけ(更)るままに、いもねられず、いとしのび(忍)がたく(難)て、みそか(密)にいひ(言)やり(遣)ける。

思ひ出ん　涙の床に　波あ(荒)れて
いまや(今)こゆ(越)らむ　末の松山*

いまだおき(起)ゐたるころ(頃)なりけり。からうじてたてまつ(奉)りける。をんな(女)な文を顔におし(押)あて(当)ていたう(甚)なきていら(泣)へもせずとなむ。あけの日きけば、にはかにむなし(空)く(答)なりけるとぞ。はしたなきわざにやありけむ。

【校異】○いかで…中之島本「いそ」に見える。○ちかけれど…中之島本「ちりけれど」。○恨みはつらん…中之島本「恨みはへらん」に見える。○いも…和文集本「いと」。

【語釈】○すさみ…勢い。○さながら…すべて。○しどけなく…整わずに。○むなしく…亡くなること。

【注】○ありそ海…荒磯海。歌枕。「ありそ」を「有りぞ」に掛ける。また「ありそ海の浜の真砂と頼めしは忘るることの数にぞありける」（『古今集』恋五、読み人知らず）のように数の多いことを導き出すのに使われることもある。ここでは恨みの尽きないことを導き出すのに使われている

か。履軒の恋歌を集めた和歌集『風懐百首』一六に「ありそ海の岩またゆたふなびきものなびくとみえて手にはとられず」という歌がある。○思ひ出んの歌…「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」（『百人一首』、清原元輔）を踏まえる。

六、与竹里翁（竹里翁に与ふ）

＊『古今集』校訂に関する加藤景範あての書状。加藤は懐徳堂門人であるが、歌人でもあった。

『古今集』の初校はおきな（翁）のおほせ（仰）にてぞ、たどりし（迦知）らぬ道をふみ（踏）わけ（分）つる。されば罪うべき（得）ことと（嘆）なげきつつも、みだ（妄）りにかい（書）つけたることのおぼつかなさ。こたび（此度）の再校もおほせ（仰）にはあれど、わた（私）くしの心にはさきのみだりがはしきものをほとほとと（取）りすて（捨）て罪をかろ（軽）めてとてなん、さらばとは思ひたち（立）ぬるを、心にまかせ（任）ぬものはかいな（腕）にて、いやましにかい（書）つくるほどに、罪はいよいよふかく（深）なりまさるをいかが（如何）はせむ。よしや、みそなはして後にかいやりたまへ。＊おひし（生）げるあし（芦）のひとふし（一節）も罪あるまじうおぼさんことのありもせば、あなかしこ、名をのぞきてとりいれたまはらんかし。数ならぬ名たて（立）しもこそいとびんなけれ。＊なにはのこと（難波）もみぬさきに（先）よしとは思はざらまし。みんひと（見人）のためさへいとおしく（惜）こそ。

【語釈】○みそなはして…ご覧になって。○かいやりたまへ…捨ててください。○びんなけれ…「便無し」で具合が悪いこと。

【解説】この文章によると、履軒は『古今集』の校訂をしたようだ＊。履軒は、『古今集』に『古今六帖』との字句の異同などを書き入れた『古今集雛題』を残しているが、あるいは『古今集』校訂のための書き入れ本か。また履軒には古今序について論じた『古今二微』という著作がある。

＊山中浩之は、この文章を、竹里が履軒に『古今集』の校正を命じたものとする（『中井竹山・中井履軒』二七五頁）。

七、世のたから

＊世の中の物の値段に関する論。贅沢品を退け実用品を尊ぶ履軒の価値観がよく現れている。『遺草合巻』にもあり、見せ消ち、挿入があることから草稿だとわかる。

世中のたから（宝）、時により処によりて貴賤あるはかぞ（数）

ふるにいとまなし。

おしなべていふに、いますこし価のいやしくあらましかはと思ふものは、あかがね。家ごとに用ゆ*とはすれど、いまだ銅の用をつくさず。また、しれものにぬすみ心つくよ。かかるたからを年々に遠きゑびすにわたし給ふ*まつりごとはいかにぞや。こがね、しろがねはたとくまれ、いやしくまれ、にはかなるのぼりくだりだになくば、さてありなん。ゑびすにわたすもかへりておしからず。ま綿。木綿に十倍すればまどしき者のはだにふれがたし。おひ人のなげきにもや。

価のよきほどなるものは竹。家ごとに用ひていささかのことにも此君*なくてはとぞおもふ。まことに竹の用はつくせり。紙、墨、筆、木わた、すゑ物、刃物。ふるき茶の具*、太刀、刀はいざしらず。塩、酒、くろがね。*

いますこしたとくあらましかはと思ふものは、からし、唐からし、柚、みかむ、はぢかみ*。あまりに得やすければ下が下*までも口にあき目になれてかばかりのもの*にめづる心うすし。杉まるた。これも目なれてめでやらず。いとおしきわざなり。とくさ。たとしとて用ひぬかは。今は功たかくて位おとりたりや。いすの木。から木とてまれなるをめづるは世のならひにや。およそ木のうちに、から木に似たるはただいすなめり。いかなれば、この国の人のこれをめでざる。くし、ねつけの外には用ひぬこととすめり。されば、薪にたきすつるぞ、いとおしき。

いとたとくあらましかはと思ふものは、麻黄、石膏、玻璃*、たばこ。さらば、まどしき者、此味をしらでおのづから火災もすくなかるべし。黒砂糖。さらば、みどり子の病もすくなかるべし*。このふたつはありて何の益ぞや。なくてもあらなむ。

【校異】○用ゆ…『遺草合巻』は「用ふ」を見せ消ちして直す。○給ふ…『遺草合巻』「玉ふ」。○まつりごと…『遺草合巻』は「まつり」は挿入する。○かへりて…『遺草合巻』は挿入する。○とぞ…『遺草合巻』は「ぞ」は挿入する。○ふるき茶の具…『遺草合巻』は挿入する。○くろがね…『遺草合巻』「鉄」。○下が下…『遺草合巻』「下がしも」。○までも…『遺草合

巻』は「も」は挿入する。○もの…中之島本「との」。○功たかく…『遺草合巻』「功高く」。○まれなる…『遺草合巻』は「すくなき」を見せ消ちにして直す。○およそ…『遺草合巻』は挿入する。○ただ…『遺草合巻』は挿入する。○たきすつ…『遺草合巻』は「す」を見せ消ちにして直す。○麻黄、石膏、玻璃…『遺草合巻』は傍らに足す。○此…『遺草合巻』は挿入する。○病も…『遺草合巻』は「も」は挿入する。

【語釈】○此君…竹の別名。○はぢかみ…生姜、および山椒の異名。

【注】○いす…炭にもされたらしい。炭としても安物だった(『近世後期における　主要物価の動態(増補改訂)』三井文庫編、東大出版会、一九八九)。○たばこ…履軒はたばこは体に悪いとは考えていなかった(『老婆心』)。○黒砂糖…当時、黒砂糖は薬としても使ったらしい。砂糖自体安いものではなかった。ただし、履軒は体に悪いと考えていた(『老婆心』に詳しい。『遺草合巻』所収の「柔遠」にも見える)ため、人々の手に入らないように、さらに値段を上げるべきだと考えたのであろう。

【解説】履軒は倹約主義と鎖国主義(貿易縮小論)を唱えていた。倹約主義については、『華胥国物語』を、鎖国主義(貿易縮小論)については、「柔遠」(『遺草合巻』所収)、「利政雑議」「擬喩」(『履軒髦言』所収)、「蝦夷辨」(新田文庫蔵『履軒先生遺稿雑集』所収)にそれぞれ見える。

八、巴歌集序

＊「巴歌集」は未詳。『国書総目録』に見えない。

ふじの烟(富士)もたえて久しくなり、ながらの橋(長柄)も尽はて(つき)(果)にたる世にしあれど、みそぢ(三十一文字)ひともじのことのはのみ(言葉)はくれ竹(呉)のよよ(世々・節々)につたへ(伝)て、浜の真砂のよみ(詠)つくす(尽)べくもあらず。

けだし(蓋)くも、青民くさのうまれ(生)かはり(変)、おひ(生)かさな(重)れども、心のたねの常磐にうごき(動)なき世のため(例)しかも。やけ(焼)野のあとの草わか(若)み、もえ(萌)いづる(出)みどり(緑)の色ぞ目もはるに(春)なびき(靡)あひぬる。風のたより(便)に思ひおこ(起)せば、この草はよし(良)、かの花はわろし(悪)などいふ(言)めるは世の中のくすし(奇)心にや。

とまれかくまれ、雨露のおなじ(同)めぐみにおひ(生)出くるものをひとり(一人)ふたり(二人)の心もて、難波のよしあし(葭芦・善悪)をあらそ(争)ひてんやは。さらばうめ(梅)は香をもてさけ(咲)、桜は色をさけ(咲)、ゑび(蝦)は味をたてまつ(奉)れ。くれ竹(呉)はみさほ(操)をたてよ(立)。われ(我)はよそに見む。

【校異】○もえ…中之島本「もへ」に見える。

【注】○ふじの烟～尽はてにたる世…『古今集』仮名序に「今は富士の煙も立たずなり、長柄の橋もつくると聞く人は、歌にのみぞ心を慰める」とある。長柄橋は、早くになくなり、古いもの、壊れたものとして歌に詠まれてきた。履軒の恋歌を集めた和歌集『風懐百首』に、富士山の煙を詠った歌として「わが思ひ身をしる雨にきえもせでふじの烟のもえつつぞふる」(二四)と「いつまでぞならぬ思ひはふじのねの烟も今は絶にしものを」(三六)とがあり、長柄の橋を詠った歌として「わが契ながらの橋のくちはててうかりしふしぞ猶残りける」(七九)がある。○浜のまさご…『古今集』仮名序に「わが恋はよむとも尽きじ有磯海の浜の真砂はよみつくすとも」という歌があるのを参照。

九、ふきのことば

＊ 蕗についての考証。同様の内容は、『履軒先生富貴之説、葵説(月可録)』(新田文庫『履軒先生遺稿雑集』所収)、『葵説』、『画鱗』にも見える。

ふきてふ草こそいとけうあるものなりけれ。ひとたびうへわたせば、年々おひつづきてたゆることなし。土地のゑらびもなく賤がかきね、あしのまろやのめぐりまでも、むつかしきばかりおひ広がりて、朝夕ものすれどつくすべくもあらずかし。葉も花も香味よく、みどり子の薬にさへたぐひなしといふめり。さるをよの常にめなれてめでさはぐ人のなきぞいと心うきや。

蕗の字を用ゆるをひがことなりといふ人あれど、『倭名抄』に崔禹錫が『食経』を引て蕗を「ふふき」とよみたれば、さるべきことにこそ。「ふふき」は「ふき」のこゑのびたるなるべし。

冬のなかばにもえ出るにはひともとに葉はかならずみつあり。茎ひとつに葉ひとつなれば、三茎草ともいふべし。人一葉をつめば、のこるふたつのあいだよりまた一葉出てみつの数は長くかけずなん。久しくつまざればよつにも五つにも葉はなるべけれど、みつなん其常なるべし。

其葉のならびかさなりあひたるは人の軒端をふきならべたらんやうなればにや、「ふき」とは名づけけらし。ふきてふ名に文字をあてて「富貴」にかけば、まことにめでたき草なりと思ふべし。富貴は福なり。福の音は「ふく」また「ふき」の読にかよひたれば、「福草」とよびけらくもむべならずや。また「福草」を「さきくさ」とよめ

り。「さき」はさちなり。げにも「さき草のみつばよつばの殿つくり」にはよくかなひぬべし。むかし三茎草をたてまつり人に三枝部連の姓を賜はりしも、この草なるべし。三枝は三茎なり。茎と枝はもとは其かはりあれど、かつかよはして用ゆめり。一枝の蓮、一枝の灯など、から歌の常なり。「神祇令」に三枝祭あり。「義解」に「三枝花もて酒樽をかざる」といへり。冬枯に木草の花のまれなるころなれば、この草の花なるべし。三枝を「さいくさ」とよめるも「さき草」のよこなまりなるべし。

もろこしのむかしはこの草を「葵」と名づけたり。ここには「あふひ」と訓ぜり。葉をひろげて日にむかひ、やや日にしたがひてかたぶきめぐりつつ、わが根をおほひて日にあてず。されば葵は足を衛るといひつたふ。日にむかふ草ともいふなり。中ごろとなりて、このことはりをうしなひて『本草』てふ文にも葵の名をあらぬものにとられてけり。さていふやう、むかしは葵を民のくひものにしたるをいまはくふ人なし。口にも腹にも今昔のかはりありなど、いとかた腹いたしや。この国にも賀茂の祭のゆふだすきかくるあふひを葵なりと思ふはひがことにぞ。山のつたかづらの中に葉のかたちの葵に似たればとてなん、「あふひ」の名はこれにのこりたるなり。まことは「あふひかづら」といふべし。日にむかひ足をまもるてふことはこのかづらにはかつてなきことなり。やまともろこしも草はむかしの草ながら、世にしたがひて名はかはりゆくめり。かかるためしの世におほかるはなげきてもなをあまりあるべし。

かくわれひとりものしりがほにさかしらするをにくしと思ふ人もあるらん。されど、また、さかしらの名をうしとて人々はひかくれて、いはでの山のいはでやみなば、ひがことは日にましておひまさり、ふるきことは年にしたがひてきえうせなん。これをかなしとみん人あらばわがさかしらはゆるしぬべし。いでや、かく

さかしらはすれど、この外に今一くさのこりたることのあるを、なを世をはばかりてなむ。

【校異】○みどり子…中之島本「ことり子」。○なるべけれど…手稿本「なるへへけれど」。中之島本「なるべへけれど」。和文集本に従って改める。○名づけけらし…中之島本「名づるけらし」。○ならずや…和文集本なし。○かたぶき…中之島本「かたなき」に見える。○あらぬものに…中之島本「あらぬものぞ」。

【注】○『倭名抄』…『倭名類聚抄』巻十七にある。○みつばよつばの殿つくり…「この殿はむべも富みけりさきくさの三葉四葉に殿造りせり」(『古今集』仮名序)。履軒にも「このもとに一夜のやどをさきくさのみつばよつばに殿造りせり」という歌がある(『華胥国歌合』雑、僧)。○三枝部連の姓…天武紀十二年の条にある。『姓氏家系大辞典』二四四四頁(角川書店、一九六三)○一枝の蓮、一枝の灯…用例未詳。○「神祇令」「義解」…『令義解』巻二「神祇令」に「三枝祭…三枝の花を以て、酒樽を飾り祭る。故に三枝と曰ふなり。(以三枝花、飾酒樽祭。故曰三枝也。)」とある(『国史大系』)。○『本草』…明李自珍著『本草綱目』巻十六。○いはで…磐手。歌枕。「言はで」と掛けて用いられる。

十、歌のすがた

＊歌論。

やまと歌にも昔の姿あり、今の姿あり。いかなる処よりかくはわかれきにけるにやと思ふに、昔の人は心に思ひよりたることを其ままに引ませたることなく、さながら、うつくしも、やさしくも、いひあらはすなめり。されば、ことばのひややかにてかたくなしからず、ただ一筋にして数々の飾はなし。けだし心の種よりもえいでることの葉なればにや、うち聞たる耳にもさはやかにして心あまりあるやうなり。これなん昔の姿なるべし。それをよしとはみながら、「いかでかくうつくしくいひいでん、いかでかくやさしかるべき」とのみ心をいれてとかくするほどに、数々のかざり物をとりあつめて巧をそへていひならぶるより、今の姿とはなりけらし。『中務の日記』にいへらく、「こよなう霧もふりまさりて、木々の梢も見へわかず、かすめる空にかりなきわたりてあはれもそへておもしろければ、

霧こめて　あはれも深き　秋の夜に

雲井の雁も　鳴わ(渡)たるかな」

この歌は今の姿なり。このはじめ(初)の五もじ(文字)をかりて前の詞にうち(打)あ(合)はすれば、さながら昔の姿となりぬべし。

霧(籠)こめて　木々の梢も　見えわかず(分)
かすめる(霞)空に　雁なき(鳴)わた(渡)る

又この第四句を「かすめる月に」とあらため(改)ば、一きは(際)おもしろき歌とはなるべし。されど、歌のおもしろくて姿はくだり(下)ゆくならん。そもそも*歌のよしあし(良し悪し・葭芦)などは難波の浦に年へ(経)し田鶴はかへ(却)りて見しら(知)ぬにしも。ただその姿の昔今のかは(変)りあるをかかるたぐひ(類)にもやとしるし(記)おくなり。

＊以下小字。

ここに今といへ(言)るは昔にむか(対)へていへ(言)る今なり。その今はただいまより(今)みてはまた昔をいふ(言)べし。昔の今より今の今にいた(至)りて*今てふ罪はますます(益々)ふか(深)くなるべし。

【校異】○思ひよりたること…中之島本「思ひよりたぞこと」に見える。○引ませ…和文集本「引まき」。○耳…中之島本「年」。○ある…中之島本「やる」。○それ…中之島本「みな」。○なりけらし…中之島本「なりけふし」に見える。○そえ…中之島本「そへ」。○見え…中之島本「見へ」。○そもそも…中之島本「色々」。○みては…中之島本「みんに」。○いたりて…中之島本「いたりては」。

【注】○心の種～ことの葉…『古今集』仮名序に「和歌(やまとうた)は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」とある。○『中務の日記』…『中務内侍の日記』。

【解説】履軒は古ぶりを評価する。それは漢詩においても同じであった。詳しくは、『履軒古風』『履軒古韻』解題を参照のこと。

一一、夢路草枕

＊夢での東国行を題材にした歌物語。富士山についての考証が詳しい。

うば玉の*やみ(闇)にまど(惑)へる*老らく*のいづれの月いづれの日にかありけん、都をい(出)づるとて、

旅衣　けふ(今日)た(裁・立)ちそめ(初)て　草枕
ふじ(富士)のすそ(裾)野に　いつかむすば(結)ん

関の明神にて、

君が代に　あふ坂山は　関もなし
　ゆくもかへるも　神のまにまに*

粟津原にて、

草枕　月になれにし　袖だにも
　さらにやもろき　あはづ野*の露

鏡山のふもとにて、

われもまた　いざ立よりて　鏡山*
　昔の人の　影やのこると*

老その森にて、

はしおりて　わかやぎゆかむ　あら玉の
　としをおひそと*　森のいさめし*

いせの瑞籬にまうでて、

あふぐかな　天てる神の　守るらし
　あまつひつぎの*　ひかりたえせぬ

何事の　おはしますとは　白露*の
　めぐみあまねき　いせのかみかき*

二見の浦をながめて帰るとて、

老の波　立わかれなば　玉くしげ
　ふたみの浦の*　あふたのみなし

いづこなりしや、田子の子らあしをかりうんじてむれゐてやすみおりける年いそぢばかんなるずぎやうしや、そのかたへの松のこかげにゐてしめやかに誦経したる。其形は露霜にくちにたれど、つらつきのきよげにて、ゆへゆへしくみゆる。ひとりのあしかりおのこ紙と筆をもてきて「いとたうとくも見えさせ給ふかな。賤が身の世の海をわたりかねたる。仏のみわざだにさらにもなしあへず。かかれば後の世のおぼつかなさをいかがはせん。何にてもよきことをおしへしめしたまへ」とてぬかをつくなり。かの修行者、

後の世は　まよはばまよへ（迷）　難波津*の
あし（芦）をかり（刈）つつ　世をつくす（尽）べし

とか（書）きてやがてそこをたち（立）さりぬ（去）る。いかなる（如何）人にやありけん。八橋といふ処にて、

かきつばた　咲にし津は　橋もなし
くもで（蜘蛛手）に思ふ　昔*なりけり*

在五中将*の像をおがみて、

花やくち（朽）　春や千年を　ふること（経ること・故事）の
その身ひとつ（一）は　なを*のこり（残）ける

さや（小夜）の中山はふじのね（富士の峰）を見そむ（初）る処のやうにふるき（古）道の記*などにみ（見）えたれど折ふし空かきくもり（曇）てなん。をゆき（行）ゆき（行）て、いづこ（何処）にかありけん*、夜のまに空はれ（晴）ければ、あくる（明）をもまたで旅の宿を出て浜つ（伝）たひあゆ（歩）みけるに、横雲のわかるる（分）ひまより（隙）ふと見いだ（出）したるはえもいはず（言）。

あはとみる　めもあやしきや　麻につく
蓬*がみね（峰）の　雪のあけぼの（曙）

雪のころ（頃）にはあらねど、時しらぬ（知）山なれば罪なくや。すそ野（裾）をめぐり（巡）ゆく（行）ほどに、あさ夕（朝）*みざる（見）日もなし。

あふぎこし（来）　ねがひ（願）もみつ（満・三）の　高根かな
しなぬ（死）薬は　さもあらばあれ

げに人の口*ばかりおそろし（恐）きものはあらじ*。かかるみ（御）山をもひきつ（積）みて大海原のあなたになげやり（投）すてたらんやうになん、あるかなきかと今の世までもうたがはせ（疑）けるぞ、名のみなりけることとはいひ（言）ながらも、いとかたはらいたし（片腹痛）や。

よしもなき　人に見えじと*　沈みけん*
みつ（三）の高根は　たうとく（尊）もあるか

そらごと（空言）の中にもあしう（悪）はあらぬ*一ふし（節）*はありけりとなん思ひ給ふるなるべし。もろこし（唐）のむかし（昔）、はたの（秦）

みかどのころにやありけん。大海原をこぎわたりし者のみいでたるにや、このみ山を名づけて、中なるを蓬莱山といふ、一かたを瀛洲山、またひとかたを方丈山といふめり。いかなる心にか、このみつの山は仙人のすみかなる神山にて不老不死の薬のおひいづる処なりとなん。まことはひとつ山なるをばしらで、はるかなるながめに、山のみつかさなりそびへたるとなん思ひけらし。秦皇これをきこしめして、まことととおぼして方士にみことのりして、かの薬をもとめさせけるに、年を経て手をむなしうして帰りまうできぬ。秦皇に奏してまうさく「臣らかの神山をめがけて舟をこぎよせて嶋にあがれば、この山浮世の人にはみえじとにや、するすると海の中にしづみてたづぬべくもあらず。舟にかへりて沖に漕いづれば、もとのごとくみゆ。またゆけば、またしづむ。いくたびもおなじさまなり。これまたく臣ら戒行のつたなき故にこそ」となん。いつはりおほき方士のことばなれど、またくよしもなきことをつくりかへりて出たるにしもあらず。遠ければみゆ、近ければ物にさはりみえぬといふことはりをさしおきて、海に沈むといひけんはいとおかしくこそ。わが国にては人皇第七代孝霊天皇の御宇にやあたりぬらん。この時は冨士てふ名だにありしやあらずや。まいて、歌などに入たるはいと後の世のことなめり。もろこしにては、めにみぬ山をはやくよりから歌にも文にもかきながしける。漢の武帝もかの薬をもとめさせたり。唐の玄宗の時には楊貴妃のことにつけて蓬莱仙宮をぞかこちける。又三島てふひがことも出くめり。その外のくさぐさは浪にみだれし藻塩草かきあつむべうもあらずかし。いでや、かかるめでたき山の御名をかしづきまいらせて、さらにまた蓬莱が島などいひさはぎて、むくつけき鬼のすむ海のあなたのさかひなりといひつたふるこそ、いとくちおしけれ。

また世に名だかき博山香炉は、梁の昭明太子のいとおしみける物とぞ。これは玉もてつくれり。其かたち

は後の世までもうつし伝へたれば、それを見しに、すなはち富士の山の姿なりけり。みつの峯の間より香の烟のくゆり出るやうにゑりなせり。ひとつの名は富士山炉といふなりと物に見えたり。これはむかしのことおぼろげにはあらでまことよく見さだめてつくりけらし。さればこの山をはるかに名づけて博山ともいひけるにぞ。げにはたばりひろき山なれば、この名もむべしこそ。

かかるよしなしごとを思ひつづけつつゆくに、都にのぼる人にはしなく行あひたり。みしりたる人にてありければ、この歌ひとつふたつ立ながらかきつけて、ふる里にことづてやりける。其おくに、

さのみやは　ことばにのべん　ふじの雪
　きくともいかで　みるにおよばん

この夜のやどりは何とかいひし鐘のねに目をさまして、

はばひろき　山の裔野の　草枕

夢さへゆらに　山めぐりして

さてねられざりければ、枕おしやり、ともし火ひきよせて都いでしよりのことを家づとにとてかきくづしける。ことはてて、ふたたびねたるに、こたびはいぎたなくて、日影のさしいるをもしらでなん、ふとおきいでて見れば、あやし、なにはのわがまろやにてぞありける。さればみな夢なりけり。たとひ夢にてもあれ、まさしく筆とりてしるしけるものをとて、ほとほとねんじいだして、かいつけてみれども、はつかに十が一になん。

母屋の柱にかきてありける長歌。

はるくると　むかふそなたや　なみぢわけ
かすみて出る　はつ日影
くわの小枝の　なびきあひて
あまねく照す　よろづ国
そのもとづゑを　たづぬれば
あきつむしとぶ　天の原

日のいづるてふ(出)* 日のもと(本)*や
おひ(老)ずしなず(死)の 薬おふ(生)*
蓬の山の なつか(懐)しきかも

反哥*。

偽りの なき(無)世なりせば むかし(昔)へや
桑も蓬も たれ(誰)かつみ(摘)てむ*

これは、もろこし(唐)人のよみけるやまと(大和)歌なりとぞいふ(言)なる。はたさらにいつはり(偽)*にてぞあるべき。いかなる(如何)もののわざにや、足たゆく(解)、いたう(甚)こうじ(困)にたれば、酒のみ(飲)などして、やがてふし(伏)ぬる。

【校異】○冒頭部…手稿本は「旅衣、ふと思ひたちて、東路におもむく。」を見せ消ちにし、横に「うば玉のやみにまどへる老らくの」とある。和文集本は、見せ消ちの部分を残して冒頭に置き、「うば玉の」以下を続ける。○やみ…和文集本「闇」。○まどへる…和文集本「まどへる」。中之島本「よへる」。○老らく…中之島本「老らこ」。○いづれの日…中之島本「ひつれの日」。○旅衣…和文集本「たび衣」。○ゆく…和文集本「往」。○あはづ野…和文集本「粟津の」。○鏡山…手稿本「みてゆかん」に傍線を引き「鏡山」と書く。和文集本「みてゆかん」。中之島本「鏡山」。○おひそ…中之島本「おひろ」に見える。○いせ…和文集本「伊勢」。○まうでて…和文集本「詣て」。○白露…和文集本「しら露」。○かみかき…和文集本「神かき」。○浦…和文集本「うら」。○その…和文集本「其」。○其形…和文集本「そのかたち」。○つらつき…中之島本「つらつさ」。○おのこ…手稿本は「叟」を、和文集本は「おきな」を見せ消しにして直す。○紙…和文集本「かみ」。○給ふ…和文集本「給ふもの」。○たまへ…和文集本「給へ」。○山なれば～ゆくほどに…中之島本は「罪なくや」が「めぐり」の後にある。また「めぐり」が「めぐりつつ」となっている。手稿本の挿入を見誤ったか。○昔…和文集本「むかし」。○なを…和文集本「猶」。○ありけん…和文集本「ありけむ」。○出て…和文集本「いでて」。○見…和文集本「み」。○は…和文集本なし。○あさ…和文集本「朝」。○口…和文集本「くち」。○あらじ…和文集本「なし」。○見えじ…和文集本「みえじ」。○沈みけん…手稿本「沈みにし」を見せ消ちで「沈みけん」に直す。和文集本「沈みにし」。中之島本「沈みけん」。○あらぬ…手稿本は「思はれ」、和文集本は「おもはれ」をそれぞれ見せ消ちにして直す。中之島本は「あられぬ」。○原…和文集本「はら」。○者…和文集本「もの」。○たる…和文集本「ける」。○処…和文集本「ところ」。○まことは…中之島本「まことには」。○おぼして…手稿本は「思ひ給ひて」を見せ消ちにして「おぼして」に直す。和文集本「思ひ給ひて」。中之島本「おぼして」。○薬…和文集本「くすり」。○帰りもうできぬ…和文集本「かへりまうできぬ」。手稿本、和文集本は挿入で補う。中之島本「帰りぬ」。○しづみ…和文集本「沈み」。○かへり…和文集本「帰り」。○漕…和文集本「こぎ」。○故…和文集本「ゆへ」。○またく…中之島本「また」。○てかへりて…手稿本は挿入で補う。中之島本なし。○あたりぬ…中之島本「あたる」。○なめり…中之島本「あめり」。○から歌にも文にも…和文集本「文にもから歌にも」。○かこちけ

る…和文集本「らこちける」。○出くめり…中之島本「出にめり」。○藻塩…和文集本「もしほ」。○いひさはぎて…中之島本「いひさはれて」。○博山香炉…中之島本「博山香煙」。○いとおしみける…中之島本「いとおしみたる」。なお、手稿本はこれを「秘蔵せし」に棒線を引いた横に書く。和文集本は「秘蔵せし」の後に、中之島本は「秘蔵せし」の前に置く。○其…和文集本「その」。○うつし…和文集本「移し」。○たれば…和文集本「たり」。○なり…和文集本なし。○見えたり…和文集本「みえたり」。中之島本「見えたる」。○されば…和文集本「かかれば」。手稿本は見せ消ちで直す。○かかる…中之島本「かかり」。○はしなく…中之島本「ははしなく」。○立ながら…和文集本なし。○ふじ…和文集本「富士」。○きく…和文集本「聞」。○およばん…和文集本「およばむ」。○やどり…和文集本「とまり」。○ね…和文集本「音」。○裔野…和文集本「すそ野」。○ゆら…中之島本「ゆう」。○よせて…和文集本「よせ」。○家づとに…和文集本「家づと」の後に「の料」を挿入する。中之島本「に」なし。○見れば…和文集本「みれば」。○まろやにて…和文集本「まろ屋にて」。中之島本「まろやにてて」。○なりけり…中之島本「なりけりな」。○なん…和文集本「なむ」。○母屋…中之島本なし(空格)。○かきて…和文集本「かきつけて」。○はる…和文集本「春」。○こなた…中之島本「そなる」。○なみぢわけ…和文集本「波路わけ」。中之島本「なみぢわ」。○小枝…和文集本「さ枝」。○なびきあひて…中之島本「なびきあひと」。○照す…和文集本「てらす」。○もとづゑ…和文集本「もとづえ」。○たづぬれば…中之島本「みぬれば」。○天の原…中之島本「天津空の原」。○いづるてふ…中之島本「いづるこふ」に見える。○日のもと…和文集本「日の本」。○薬…和文集本「くすり」。○蓬…和文集本「よもぎ」。○つみてむ…手稿本、中之島本「つまらし」と「つみてむ」を併記する。和文集本「つまましし」。○反哥…和文集本、中之島本「歌」。○いつはり…和文集本「偽り」。

【語釈】○あまつひつぎ…天つ日嗣ぎ。天照大神の系統を受け継ぐこと。

【注】○「君が代に」の歌…逢坂は歌枕。「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも逢坂の関」(『後撰集』一〇八九、『百人一首』)を踏まえる。○「われもまた」の歌…鏡山は歌枕。「鏡山いざたち寄りて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると」(『古今集』八九九)を踏まえる。○「はしおりて」の歌…老蘇は歌枕。「変わりゆく鏡の影をみるからに老蘇の森の嘆きをぞする」(『金葉集』五九九)を踏まえるか。○あしかりおのこ…謡曲に「蘆刈」という作品がある。難波に住む夫婦が貧窮のため後日を誓って別れ、妻は京都に上る。妻はやがて、貴人の乳母となり、従者を伴い夫を尋ねる。そこで蘆を売る男と会う。女は夫だと知るが、夫は零落の身を恥じ姿を隠す。やがて歌を交わして名乗り合い、共に都へ上る。という話である。本文はこの芦刈伝説を意識したものであろう。○かきつばたの歌…『伊勢物語』第九段に「そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。」とあるのを踏まえたもの。○在五中将…『伊勢物語』の主人公とされる在原業平のこと。○ふるき道の記…未詳。富士がよく見える場所とされているのは田子の浦(『歌枕歌ことば辞典』角川書店、一九八三)。履軒も自身の『百人一首』の注釈書『百首贅々』の「たこの浦にうち出てみれば…」に「コヽニ至マデハ丘陵ニ隔テラレテ富士モ未ミエザリシニコノ浦ニ出テ初テ富士ヲ打望タルハエモイハズ面白キナリ」という注を附けている。○麻につく蓬…「麻の中の蓬」は良い人の感化を受ける喩え。『荀子』勧学篇の「蓬は麻の中に生じ、扶えずして直し」に拠る。○蓬莱山、瀛洲山、方丈山…

司馬遷『史記』始皇本紀に見える。○蓬莱仙宮…白居易「長恨歌」に「昭陽殿裏恩愛絶、蓬莱宮中日月長」とある。○博山香炉…梁の蕭統(昭明太子)に「銅博山香炉賦」がある(『昭明太子集』巻一)。なお、懐徳堂遺物に履軒が自ら作ったという(『懐徳堂考』下七九頁)楽焼きの博山香炉がある。富士山の形をして頂上部が三峰に分かれている。蓋と身に分かれ、蓋の上部には香の抜ける穴が開いている(蓋の上部前後部に穴が各一箇所、前部(正面)には線上の切れ目が三箇所。一番上の線上の切れ目は穴と繋がる)。サイズ:蓋:縦一六・五㎝×横二六㎝、高さ一〇㎝。身:縦一三・五㎝×横二一㎝。身に蓋を被せると約五㎜浮く。口絵参照。なお、『画觸』にも博山香炉について同様の記述が見える。

一二、しのぶ摺*

＊しのぶ摺に関する考証。しのぶ摺の語源は、人目をしのんで密かに染めたからであるという。同様の内容は『百首贅々』の「陸奥のしのふもちすり…」の歌の注にも見える。

蕨に似たる軒の釣草を「しのぶ」と名づけたるは世のさがなめり。ひとつ葉*似たるふるき軒ば、垣のうへなどにおほる草を「しのぶ」といふは『和名鈔*』この*かたさだまりたることなれど、摺にはるんなしや。

陸奥信夫郡より、いにしへ、この布を貢せしといふはあとかたもなきそらごととかや。しのぶ郡にて石の面にてすりたりといふもひがことなりときく。軒のしのぶ草の形をすりたりといふはこの解説になやみて、いろいろ思ひめぐらして、やうやうとになひいだしたることにこそありけれ。そも児のわがくつの底なすものを、何の見どころありて、衣の紋にすりなさんやは。されば、このくさぐさは、皆しのぶ摺には用なし。引つかねて西の海にながしやるべし。

かのしのぶ摺てふものは、かつて草の名によりたることにはあらずかし。すべてきぬを染むるには色の汁を甕にたたへてきぬを漬ひたして色をなすを「染」といふ。板の上にきぬをしきて、木草の葉にまれ、花にまれ、其上よりおさへてすりつけて紋をなすを「摺」といふ。おしこめていへば、皆「染」なり。今の世に華布を染るは「摺」なれども「摺」とはいはぬにてしるべし。是よりは、おしこめて「染」もていふべし。

いでや、狩衣は礼服ならね*、行幸、御幸などの御供

につかうまつる*には、ことに引つくろひて美をつくしてかざることなり。其外、禊、斎会なども晴がましきあたりはみなしかなり。若草摺、遠山摺などくさぐさの名おほくあるべし。もとより格式なき服なれば、花にまれ、鳥にまれ、よろづよろづ思ひに染出すことなり。かかるわざは其板にかたをちりばめ、あるは紙をたたみて形をきざみ、又、糊を用ひなど、これを身のわざとする人ならでは、なしゑがたしや。

内わたりには染殿あり。染坊あり。親王、大臣の家などは其まねびもあるや。かろき公達、殿上人などは、いかでさるまうけのあるべきやは。おほやけの儀式につきてこそ、きともていでて染坊などにてそめけれ、わたくしの狩衣は家どうじ、女わらはべの手まさぐりにてことすむべし。いとむつかしげなるわざはあらず。かたよ、糊よとひしめくことはなく、ただ色よき草木の花や葉をとりて、おしふせてすりつけそむることなれば、青き赤き黄なる紫うちまじりてみだれにみだれぬべし。花もさかず、鳥もとばず、この葉の形だにもなし。その染坊などにもていでず人にもおほせず、ただわたくしにみそかにそむる故にぞ「しのぶ摺」とは*いふなりけり。今の世にてはかかるわざを「手染」となんいふめり。哥*にてしのぶにみちのくをかうぶらせたるは、若紫に春日野をかうぶらせたるとおなじかるべし。

もじずりとは其みだれのねぢれもぢれたるをいふなり。文字にあらず。されどこれはむかしより人のいへることなれば、めづらしからずとて、ここにはもらせるなるべし。

【校異】○ひとつ葉…和文集本「に」を挿入し、「ひとつ葉に」にする。○おほる…中之島本「おほけ」に見える。○和名鈔…中之島本「和名抄」。○ならね…中之島本「ならぬ」。○つかうまつる…中之島本「つかうまつ」。○とは…和文集本「と」。○哥…中之島本「歌」。

【注】○しのぶ…「陸奥のしのぶもじずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我れならなくに」（『古今集』恋四、『百人一首』）参照。○『和名鈔』…『和名類聚抄』巻二十に、「垣衣。『本草』云、垣衣、一名烏韮。和名之乃布久佐（しのぶぐさ）」

とある。○若紫に春日野をかうぶらせたる…『伊勢物語』第一段に「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限りしられず」という歌が見える。

一三、しがらみ

＊恋物語。履軒の女性観が窺える。『老婆心』手稿本（巻子本）にも「しがらみ」が附されている。ただし、これは後人の抄である。仮名と漢字の違いが多数見られる他、言い回しが違う箇所が若干ある。本稿の校異では、言い回しの違いのみ挙げた。その他、新田文庫には「しがらみ」がある。天生（中井木菟麻呂）の跋が別紙にて附されている。校異は省いた。

筑前守なりける人よき子をもてり。＊次郎なりける。よろづのことにざへたかし。ことに文の道には＊妙にして、武のわざにたけたり。もろもろかれが＊師たる人、みとせの後は、みな文簿をささげてかれが＊弟子となりぬ。ゐなかにはよき友なければ、しばしとてみやこにのぼりける。年ごろ誉れはたかしめづらしとて、公達などあまたとぶらひきて、文つくり歌よみなどよるひるとなうつどひしに、ややこうじにたるや、はた心にかなふ友もなかりけるが、＊一月ばかりして心地そこなへりとて、引こもり居て、ひとり文よみて、人には見えざりける。＊夕つかたには、いつもわらはべつれて、ここかしこにふるき跡どもをたづねて、独ありきをなんしけり。

ある夕ぐれ、御溝水のながれをたどるたどるのぼりいきけるに、時雨ふりたり。かたはらなる軒のしたにしばし立やすらひしに、築ひぢの内より、もみぢ葉おほくながれ出たり。ゐなかには見もしらぬいと大きやかなるこの葉の火のもゆるやうなる、めかれもせず、ながめゐたるに、其中の一葉に文字あるやうに見えたれば、杖もてかきよせて見れば、歌なり。

紅葉ばの　ながれの末よ　いかならん
さだめなき世の　淵瀬かなしも

うちかたぶきて思ふに、「これは君の寵あるきはにはあらじを、とらはれ人のごと心ならず＊とぢこめられてわが身の行末をふかうなげきたるにもや」とそぞろにあはれなり。又其手のいみじさはいはんかたなし。「みやこ

のをんなはかくまでならひゑたるにや」と目もはなれず、おき処はなし、やをらおしのごひて、ふところにいれぬ。さらに外の一葉をひろひて、みづから歌かきて引つつみ、築ひぢの蔭にあゆみより、かの崑崙山*とおぼしきあたりになげいれて帰りぬ。その歌は、

御溝水　しがらみかけて　まちて見む
　　そのもみぢ葉の　ながれよるやと

とかくするほどに世中穏かならず、みやこには東宮のさはぎいできて、国々もつはものおこりぬ。かうの殿*は任とけてのぼらんとするに、俄かにやみふしてそこにうせ給ひし。*このかみは主上の御供につかうまつりて、あふみの国にときこゆ。こはいかにせんとて、まづ母うへを山深き寺にかくしつ。年ごろ祈の師なりける房なれば、是は心やすし。今は独身になりたれば、「いでや都のやうをもうかがひみん」とて、いとしのびてのぼりぬ。桂川のわたりしるべなる家に忍びおりけり。かかる時*しもれいのしのびありきはやまざりけり。

ある日北山寺にて仏名*しけるに、いきてあひたり。さてここかしことながめありく。あふきるさの中に、ひとりのをんなきぬふかうかづきて、次郎があとにさきにつれだちたらんやうにぞありける。「あやしや、みやこの内には相しれる人もなきを、年ごろわかけれ、あだし心もたねば、こととふべき女あらんやは」とは思ひつつ、「もし人たがへならばそれとつげまほしう、なをかれよりものいふまで」とねんじてあとにつきて*ゆくめり。かれはたかへりみがちにて、北野の森過るころは日もくれかかり、人けもなかりければ、ねんじわびて「やや」とよびとどめて、「みもしらぬ人の、なぞやかへりみがちにしたまふらん。門たがへたまはんはびんなかるべし。おのれをば誰と見給ふにや、かたはしあかさせたまへ」といふに、女かほうちあかめて、「卜部にはあらず、いかでしらぬ君が名をさしでんや。みづからは人を尋るものにてさむらふ。されば、かく人おほきあたりは物ぐるほしう、ひとりたづねめぐ

りさむらふなり。」「それはかほかたちいかさまにおはしますにや。名を何とたづぬべきにや」といふに「さればとよ、名も知らず、影だにもみぬ人に心をくだくにてさむらふよ。」「しからば、いかで何がしをみしりたらんやうにはしたまふぞ。」「けふなんおほくの人を見そなはし給ふるに、ひとりおことのみよく物をもいふべく、いと心ありげに見えさせたまふ。なをかかる友千鳥もはたすくなからじをひたすらにうち出てうたへ奉らんとてなん、しばしば立どまりはしたりけれど、いかにせん、おほくの人目のつつましさになん」とうちそむけていふ。

次郎いよよあはれに思ひなりて、「それはなにをかたづねくさにはすべき。玉のかんざしにてもあらば、かたりいでたまへば、さらば命をかぎりに宮つかへなし奉らん。」「かんざしはなけれど、ただ御溝水のしがらみとたづねたまへ」といふ。

次郎是を聞て、きと胸にあたりてければ、「それこそ、いとしもやすき。まず御心をのどめて待たまへ。さらば君はいちしやう流れの末のもみぢ葉よ」などいひければ、をんなうちおどろきて、「あやし。いかでかなしき淵瀬をしろしめしけん。あらふしぎや」とてさしうつぶき、さらに物思ひのそひたるけはひぞする。

やがて、「其しがらみをゐ(給?)て奉らんにはいかばかりの宮づかへをしたまはんや」とうちほほゑみていひければ、「あな、はづかしや。いはでの森にはひかくれまほしきを、かの時より神仏に願たてたるやうは、たとひ鼻はかけたりとも、かた目蠣を吐いだしたりとも、老かがまりてゐひなすとも、ただこのしがらみを引あはせたまへ。いかなる蘆のまろやにもはひいりて其北の方とならんと、よるひるちかひにしものを、いまさらにつつみかくすべくもあらずかし。また、人わろしとてもいかでこのちかひを露そむくべきや」といと心清くいひけり。

次郎はたあはれまさりて、ふところより、かのもみぢ

葉をとり出して、「是はいかに」といふ。女は膚の守りをときてしがらみをいだしたりけり。「さてはうたがふ*べくもあらぬあめつちの神のむすびさだめたまひし契なりけり」と、次郎は始めて心ときめきしけり。をんなはうつし心もなく土のうへにたうれふして、ただなきになきゐたり。としごろの願忽にかなひ、まのあたりしがらみにかかりたれば、神仏のかたじけなさに心さはぎして、玉のちりうせたるにぞありけらし。「うれし。たのし」などはいまだ思ひもかけずかし。*ややといだきおこして裙の砂はらひ、*きぬ引あけて袖して涙おしのごひまいらせたるに、弓張の月影にかがやき*て、たぐひなうきよらにあてやかなり。そこら草葉の露とりて口にいれなどするほどに、玉のかへりきませるにか、やうやう人心つきたり。はやうちとけがほにゆうゆうと肩の上によりかかりたるはゐもいはずらうたげなり。

「さらば、ただちにゐていぬべし。君がやどりにて尋ねまどひやはせぬ。はらからはむつまじくて心ばへよかりけれど、みづからがあまりかたくなにて人のいひごと*をききいれぬとて、はらたちて、『いづこいかなるゐせおのこなりとも、このかたくな*をぬすみていねかし』などむつかれば、一日ふた日みえぬとてさしもたづぬるまではあらじを」とて、次郎に手をひかれて、かのしのぶの宿にいたりぬ。「ふる郷の宿の妻がたづねのぼりしに、はしなく行あひてゐて来りし」など、こしらへければ、あるじことの外によろこぼひて、さまざまに心を尽してかしづきすえたり。

四五日ありて、氏長者より使者参れり。「北国の凶徒誅罰のため丹波丹後の軍勢三千余騎召寄たれ共、当時諸方の手つかひに因て、大将に事をかきたり。武略の誉れあらんもの閑居逸遊の時節にあらず。且は君に対し奉りてその懼れあるべきものをや。急ぎ馳下りて、一方平均の功を励むべき者なり」と御教書くだれり。

この日、上野掾になりてやがて打立けるが諸処の戦

に利を得て、いく程(幾)もあらぬに北国ことごとく(尽)撃平らげ、それより東国にむかひて(向)みちのくまで(陸奥)撃したがへ(従)て帰陣せり。其後また西国南海におもむき(赴)、度ごとに(毎)大功を立たりければ、だむだむ(段々)昇進して、三位右大将になりて、世のおぼえならぶもの(者)なし。かのもみぢ葉(紅葉)もよきしがらみ(柵)にかかりて右大将の北の方と仰がれ、はらから(同胞)もろともに栄耀にほこれり。おの子もみはし(男)(柱)らもてり(持)。よろづ(万)心ゆく御溝水(みかはみづ)にてぞありける。およそ女は、心あだあだしからでまこと(誠)のふかき(深)ぞ何事に(勝)もまさるべしとかや。

【校異】○もてり…『老婆心』附録「もてりける」。○には…中之島本「は」なし。○かれが…和文集本、中之島本「が」なし。○文簿…『老婆心』附録「名簿」。名簿(みょうぶ)は、弟子入りする時に師匠に渡す名札。○かれが…『老婆心』附録なし。○めづらし…中之島本なし。○となう…『老婆心』附録なし。○もなかりけるが…和文集本「となりけるが」。中之島本「もなかりけり」。○心ならず…『老婆心』附録なし。○いできて…『老婆心』附録「いできたり」。○国々…中之島本「国に」。○うせ給ひし…和文集本「みを給ひし」。中之島本「うせ給ひ」。『老婆心』附録「うせたまひぬ」。○なりける房なれば…『老婆心』附録「の房なりければ」。○かかる時…中之島本「かか時」。○仏名…和文集本「仙名」。○あふきるさ…『老婆心』附録「にあふさきるさ」。○年ごろ…中之島本「年こそ」に見える。○ならば…『老婆心』附録「ならませば」。○なを…中之島本「なぜ」。○つきて…中之島本「つれて」に見える。○たまはんは…『老婆心』附録「はばいと」。○びんなかる…中之島本「びんなる」。○おはしますにや…中之島本「おはしまけにや」に見える。○心ありげ…中之島本「心あたりげ」。○はたすくなからじ…手稿本「おほかるべき」を見せ消ちして右に「はたすかなからじ」と書く。中之島本も「はたすかなからじ」と見える。和文集本は「か」を見せ消ちにして「く」に直す。ここでは、和文集本に従う。○けれど…和文集本「けんど」。○たまへば…『老婆心』附録「たまへ」。○やすき…『老婆心』附録「やすき事なれ」。○しろしめしけん…中之島本「しろしめけん」。○其しがらみ…手稿本、中之島本「しがみ」。和文集本は右に「ら」を補う。ここでは和文集により「ら」を補う。○したまはんや…手稿本は「は」が「ふ」に見えるが「ハ」だと思われる。和文集本は「ふ」を見せ消ちにして「は」に直す。中之島本「したまふんや」。『老婆心』附録「したまふらむや」。○かた目…『老婆心』附録「かた目は」。○老かがまりて…『老婆心』附録「腰は老かがまりて」。○にも…『老婆心』附録「なりとも」。○あはれ…中之島本「あつれ」に見える。○うたがふ…中之島本「かたがふ」。○しがらみに…和文集本「しがらみぞ」。○かけずかし…『老婆心』附録「かけざりけらし」。○はらひ…『老婆心』附録「うちはらひ」。○月影…手稿本、中之島本「目影」。和文集本によって「月影」に直す。○そこら…手稿本「そこら」か「そこに」か不明確。和文集本「そこら」。中之島本「そこに」。○かたくな…中之島本「かたけな」に見える。○あまり…『老婆心』附録なし、下の「人の」が「あまり人の」。○いひごと…和文集本「いろごと」。○ふる郷…中之島本「ふるさと」。○しに…『老婆心』附録「たるに」。○よろこぼひて…『老婆心』附

録「よろこぼて」。○尽して…中之島本「つくして」。○たれ共…中之島本「たれども」。『老婆心』附録「たりといへども」。○かきたり…『老婆心』附録「かきぬ」。○あらんもの…和文集本「あらんとの」。中之島本「あかんもの」に見える。○諸処…中之島本「諸所」。○いく程…『老婆心』附録「いまだいく程」。○おもむき…『老婆心』附録「おもむく其」。○しがらみに…中之島本「しがらに」。○おの子…『老婆心』附録「おのこ子」。○ふかきぞ…中之島本「ふかきに」。

【語釈】○しがらみ…「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（『古今集』三〇三、『百人一首』）。○崑崙山…中国の伝説の神山。西方にあり、仙女西王母が住むとされた。○かうの殿…かんの殿に同じ。長官のこと。○仏名…懺悔。○あふきるさ…「あふさきるさ」（物事がうまくいかないこと）の誤りであろう（校異参照）。○おこと…御事。あなた。○手つかひ…配備。○御教書…みぎょうしょ。将軍の発する命令書。

【注】○〔主人公の上京、引きこもり〕…あるいは履軒自身の経験を踏まえるか。履軒は明和三年（一七六六）、京都の高辻卿の賓師として、一年間京都に滞在した。その時の様子が『洛汭奚囊』という詩文集にまとめられているが、京都での孤独と故郷への思いを詠うものがほとんどである。○蘆のまろや…芦の丸屋。あばら屋のことであるが、履軒『百首贅贅』「夕されば」の歌の注に説明がある。それによると、柱を上で合わせて円錐状に組み合わせた掘立て小屋で、地面に接する部分が円形であることから丸屋と呼ぶと言う。○東宮のさはぎ…史実で指すものがあるかどうか未詳。○玉のかんざし…白居易「長恨歌」で、天上の楊貴妃が玄宗に黄金の簪（金釵）を割いて与える話を踏まえるか。○いはで…磐手。歌枕。「言はで」と掛けて用いられる。

一四、くれなゐ

＊恋を題材にした歌物語。迷信を暴く。

むかし（昔）初瀬に＊こもり（籠）ける女ありけり。物思ひやふか（深）かりけん、なつみ（菜）水くみ（摘）、冬のはじめ（初）より、よるひる（夜昼）いの（祈）りけるが、春の末にまかでける。わがね（我）がひ（願）のおぼつかなさにや、つね（常）に物思ひがちなるを、家のせうと（兄人）あは（哀）れにおもひ（思）て、ある朝、出（いで）がてに＊、そのゐたる処をさしのぞき（覗）てみれば、櫛笥ひき（引）みだ（乱）して、ひとり（独）鏡にむか（向）ひてうち涙ぐみゐたるが、硯ひき（引）よせ（寄）て何やらん手習ふやうになん。そともに人のあしおと（足音）のしければ、やがて引かくして（隠）鏡のうら（裏）にさしいれつ。さて、友どちのとぶらひ（訪）きにけると聞て、母屋のかたに出（方）＊ける（来）あと（後）にて、かの鏡のうら（裏）なるものをとりいで（出）てみ（見）れば、しどけなくここかしこうちかさね（重）かき（書）たるうちに、墨つき

たどられたる哥ひとつありけり。

なげきつつ　いのりし山の　かひやなく
ひとすぢしるき　髪のいとゆふ

かぎりなうあはれに思ひなりて、やがて其末にちひさくかきそへける。

一筋は　ぬきてもかくせ　ふたすじを
結ばざらめや　くれなゐの糸

これは、しばしの心やりにとてなん、かくはいひけらし。

後に女これをみて心ときめきして、はらからの手をだにもみしらで、ひたすらに仏の御つげなりとおぼひて、この歌を楹のかみにおしはりて朝夕ぬかをつくなり。

一月ばかりがほどにや、その男のかたに、さはぎいできたり。ややしづまりて後は、よろづこの女のほいのままになりて、やがてうつりすみける。されば、いよよたうとみ奉りて、ふたたび初瀬にまうでてかへりまうしけり。ささげ物などはそこら法師ばらの目をおどろかしけるとぞ。心のうちにはたへがたうおかしかりけれど、さらぬ顔つくりて、はらからのよろこびの心ばえに、いとふたむらばかりおくりつかはしぬ。其つつみ紙のうへに、

くれなゐの　いとむつまじく　おもほゆる
神のむすびし　ちぎりたえずも

今の世中に神仏のつげてうことは大やうかかるたぐひなるべし。

【校異】○出がてに…中之島本「出かけに」に見える。○かた…中之島本「うた」。○たどられ…中之島本「たどくれ」に見える。○哥…中之島本「歌」。○かひやなく…手稿本「かひやなく」に見える。和文集本、中之島本「かひやなぞ」。○心やり…中之島本「川(心?)やか」に見える。○いひけらし…中之島本「いひけるらし」に見える。○ときめき…中之島本「ときめれ」。○おしはり…中之島本「おしははり」。○男のかた…中之島本「男かた」。○うつり…中之島本「かへり」。○たうとみ…中之島本「たうを」に見える。○まうでてかへりまうし…中之島本「まうでかへりまかし」に見える。○そこが…手稿本不明確。和文集本「そこら」。中之島本虫食い不明確。ここでは手稿本により推測する。○つくりて…和文集本「つ

くり」。○心ばえに、いと…和文集本「心ばえにぞと」。中之島本「心ばえに、いとど」。○つかはしぬ…和文集本「つりはすぬ」に見える。○おもほゆる…手稿本は「おもふかな」の「おもほ」を見せ消ちにして、横に「おもほゆる」と書く。和文集本「おもほゆる」。中之島本「おもほゆるかな」。ここでは、和文集本に従う。○てう…中之島本「てふ」。

【語釈】○出がてに…出かねて。

【注】○初瀬…現奈良県櫻井市にある長谷寺のこと。○なつみ水くみ…功徳を積むこと。『法華経』観世音菩薩普門品に、修行の方法として「採菜汲水、拾薪設食」とあり、それを踏まえて『拾遺集』には「法華経を我が得し事はたき木こり菜摘み水汲み仕えしぞ得し」という歌がある(一三四六)。

【解説】懐徳堂は迷信に反対を唱え、また、仏教にも批判的であった。履軒の弟子竹島賛山(さざん)の著書『賛山文稿』中の宇野怒円の話は神のお告げを暴く点が「くれなゐ」と共通する。

一五、長き夜

＊随筆。作品の制作年は未詳だが、履軒が晩年、悩みを抱えながら生きていたことが窺える。

長き夜のねられぬままに、年ごろあまた(数多)の物思ひをかさね(重)しうさ(憂)を思ひつづくるに、これはた世のため(例)しにて、年わか(若)きほどは、とかくしてつくろ(繕)ひ来ぬるを、さりしふたとせ(二年)の間は老のくれ(暮)にとりかさね(重)て、深きなげき(嘆)をつみ(積)にたれば*、いよよおひ(老)くづ(崩)れて、身もうご(動)かず、やがてもともなふべくなん。

白露の　ひるま(干る間)をかこつ　朝がほ(顔)は
　　はひま(暇)つはれよ　わが袖の上に

などいひてなげき(嘆)くらし(暮)ける。おしか(惜)らぬ命にはあれど、後の世を露ねがふ心のなければ、さしあたりて遠き旅衣をいそぎ(急)たち(裁)もせずかし。

蓬てふ　山はむかし(昔)の　山なれど
　　しな(死)ぬ薬は　今はおひ(生)いで(出)ず

たとひありといふ(言)とも、たづぬ(尋)る心のなければ、よしやいかにもあれ、水草のうきて(浮)ながる(流)る年波の今ふた(二)とせ(三年)みとせ(三年)世にありとも、まのあたる(目)みか(三日)四日すぐ(過)るもおなじ(同)かるべし。この秋は籬の菊を手まさぐり(弄)にし

て葉末の露を朝夕すひなどしけるが、やや心地さはやぎて、ほどへてよみがへりたらんやうにぞ。かならずしも菊の力にもあらざめれど徳をおぼせて、

いつのまに　年はへにけむ　うつつなき
身をしら菊の　露にぬれつつ

【校異】○うさ…和文集本「かさ」。○あたる…和文集本「る」を見せ消ちにして「り」に直す。

【注】○深きなげきをつみにたれば…相次ぐ妻子の死などを指すか。○菊…菊の露を飲むと延寿に役立つと考えられていた。

【解説】履軒の晩年の境地

履軒は自らの心境を漢詩や和歌で表現している。それらによると、履軒は晩年、一方で達観を表現しつつ、また一方では迷いを表現している。達観については、「偸語欄戒約」（『弊帚続編』所収）、「掩鼻亭後」（『柚園数記』所収）、『履軒古風』巻四の飲酒に関する数編の詩に見える。一方、迷いについては、「酔歌行」（『履軒古風』所収）、『越吟』の和歌に見える。

一六、ねのひ（子の日）*

＊子の日の夜見た夢を題材にした歌物語。履軒の視点が興味深い（解説参照）。

子日すと野べに出て、日ひと日松ひきちらし、うたひたはむれ、朧月におくられて、やどりにかへりぬれば、いとこうじて、やがてねにけり。夜ふくるままに、思はずもみどり子らおほく入きたり。おみな子とおぼしきは、みな赤き衣をきたり。おのこ子は黒みがちなる。いづれも小松を藍にすりたり。かかる者どもあと*まくらにうちかこみて、くちぐちにさゑづりのののしる。沢べのかはづの鳴かはすやうにぞ大かたは舌もとととのふらで、聞わくべくもあらず。あるは松のさゑだをしもとにとりて、うはなりうちなんする。「こは心ゑぬものかな」といとたへがたくて、うめきけるほどに、夢はさめにけり。いかなるわざにやとねられぬままに、つくづくとおもひめぐらすに、かの声々のうちに、やや年のねびたるがいひたることの耳の底にとどまりたる、ねんじいだされて、ほとほとかいつけみれば、みな歌にぞありける。

子日すと　千本の松は　根をたえぬ*

何を千年の　ためしにや引
ことしこそ　ちよの始と　ちぎりてし
よはひを君に　ひかれぬるかな

君がため　はつねの松は　引つれて
さいの河原に　瀬ぶみすらしも

いかなりし　罪のつもると　白雲の
きえまあらそふ　わが身なりけり

ちよ万　何をまつらん　初子てふ
暮をかぎりの　わがいのちかも

思ひきや　千年をふべき　小松原
人より先に　かれむものとは

常磐なる　松のみどりの　すべもなく
森のくつねの　あからびにけり

若松の　わかしと人に　いはれつつ
しでの山にや　生かはるらむ

行末を　まつとせしまに　子日かな
あたら千年を　人にひかれて

今はただ　何をまつらん　姫小松
みどりをのこす　夕烟かも

【校異】○あとまくら…中之島本「あとゆくら」。○沢べ…中之島本「沢辺」。○いと…中之島本「は」。○わざ…中之島本「あさ」。○たえぬ…中之島本「たたぬ」に見える。○つもる…中之島本「つもるか」。○ただ…中之島本「だに」。

【語釈】○あとまくら…寝た時の足もとと枕もと。○うはなりうち…後妻打ち。もと、前妻が後妻を打つこと。ここでは非条理な八つ当たりをして叩くことをいうと思われる。

【注】○ねのひ…正月の初めの子の日にする遊び。野外に出て小松を引き、若菜を摘んだ。小松引きとも言う。子の日に関する和歌は例えば以下のようなものがある。「子の日する野辺に小松のなかりせば千代のためしに何を引かまし」（『拾遺集』二三）、「ゆくすゑも子の日の松のためしには君が千歳を引かむとぞ思ふ」（『拾遺集』二九〇）。履軒『越吟』にも、子の日を題材にした歌が数首ある。

【解説】履軒は自らの居宅を夢の国、華胥国と名付け、華胥国王を自任した（冒頭解説参照）。まさに「胡蝶の夢」の世界に遊んだと言える。そこで、

大きな物を小さく見たり、小さな物を大きく見たり、様々な視点から物事を見つめた（四「題三夕図」解説参照）。本篇はその二つの特徴がよく表れた文章と言えよう。

一七、歌のすがた

＊歌論。内容は、履軒の他の歌論（『百首贅贅』、『遺草合巻』所収「集撰のさた」）と重なる。

『古今集』こそまことの精選にてこそありけれ。それだに、いかにぞやこの集には入けんと思ひたるふる歌十首ばかんも。されば、この集にもれたる古歌は、いかなる名人なりとも、それは糟歌なるべし。『後選』は、この糟歌をひろひあげて、この集の柱とすめれば、さばかりの名人もひかりをうしなふわざなりや。其世の歌などは、この糟に水をさしいれて、ふたたびしぼりたる酒にやあらん。いつのころにやありけん、『後選』より後の詞は皆用ゆべし。『古今集』の詞は今の世によろしきをゑらびて用ゆべし」とさだめ給ひしときく。おろかなる心にはいとかしこけれど、これはきざはしの一級たがひぬとぞ思ふ。「『万葉集』は今によろしきをゑらべ。『古今集』はゑらぶにおよばず」とこそさだめ給ふべけれ。およそ『古今集』に『万葉』の歌おほく入たり。みな後の世によろしきをゑらびてのせたれば、今さらにゑらぶことはなかるべし。

およそ『古今集』に載たる読人しらずの歌なん、いと妙なる歌おほし。すべて、たくらぶれば名ある人の歌にまさるかたなり。これにはいとふるきもあるべし。ところどころに「人麻呂が歌なり」「赤人かな」とうたがひたる裏書もおほかり。『後選』の読人しらずはすべてわろし。『古今集』より後の歌なるべし。これにても世のくだりたるさまをしるべし。いで、かの糟歌よ、糟とはいへ、およそは『後選』の比の歌よりまされれば柱とたのみしかひはありけり。『後選』より後の選集は大かたは『後選』のおもむけにて次々におとろへくだるめり。たとへば、清水寺の石壇をまがりくだるがごとし。一級ごとにおのが身もひきくなり、うちのぞむ山

も林もせばくなりもてゆく。そが中に『新古今集』のみは、ややうかはれり。それはべちにいふべし。ここにはいかで。

近き御代には選集のこと絶たり。これはよくこそ絶たれ。さらずば、いづくまでくだるべきや。石壇ははやくづれて、地の上になりたるものを、今さらは井をほり池をうがつならではくだるべきかたなし。

序歌は今の世にはほろびにけり。いづれの御代にか、かかる禁制をたて給ひしやあらん。いといぶかし。から歌には「比」といひ、「興」といひて、ことに貴ぶことなるを。枕ことばも今はいとすくなし。「足曳の山」「玉笥のふた」の外はあらず。これもほろびたりといふべし。縁語は歌の常なるをそれさへにくみて用ひぬ人もありとかや。

序もなく枕もせずたとへもあらで、ひたぶるにわがおもひのみをのべたるをただこと歌といふめり。から歌には、これを賦といへり。六義のひとつなれば、あしとはいふべからず。されば近ごろの歌よみはただことを歌の骨髄なりと思ひてや、もはらこれをよみけらし。百首まれ千首まれ、ただことならぬ歌はなし。されど、いにしへ人の序枕にて歌の半を埋みて其しもにはつかにわが思ひをのべたるやうのことなどをもはらただことにいひいだせば、文字の数あまりて心たらず。ここにてひたすらにことばを添て三十一字にみちたらはす故になん、むだしきことばおほくなりもてゆきて、老のくりごとのやうにきこえて歌ともおもはれぬものぞおほき。そもそもいにしへよりいひつたへし六くさのうちにて唯一くさをまもりて五くさをすてよとは誰かいひはじめけむ。又、ただことは縁語のありなしにはかかはらぬことなるを、かの縁語をにくむ人々は、縁語さへなきをただことおもひけらし。これはさらにことたがへり。

序枕のほろびたる其はじめを思ふに題歌の世にひろごりたる故にやあらん。題歌には、序枕は用ひがたし。

かくておのづからうつりゆく世のさまにこそ。また思ふにかの心の誠てふことを思ひひがみてなん。またもろこしの「思無邪」*てふことまでをひがみにひがみて、聞たがへたるにもやあるらん。また、女などは舌とに歌よむをぜにすれば、序枕など思ひめぐらすひまもなしや。ことに返し歌などすみやかならでは興もさめぬべし。かかることも、おのづから男の口にもうつりぬべし。

かなしきをかなしといひ、うれしきをうれしといふに、序枕縁語などとりまはしてよくわが心をのべたるは、すなはちわが誠なるべし。それを誠にうとしとおもふはいとひがことなめり。かの誠をうしなふとは世々の七夕天河の歌なるべし。それも七夕天河をひきつけてわが思ひをのべたるは「比」「興」の類にて、わが誠だにあらば難なかるべし。うしなふとはいふべからず。

「思無邪」もしかり。「思ひ」とは情なり。喜怒哀懼愛悪欲を七情*といふ。歌は物をかりて思ひをのぶるものなれば、かならず七情にもるることなし。七情なきは歌にあらず。今の題歌は題の意をいひかなふるをぜにすれば、時としては七情のうちひとつもなき歌あり。*これはいかなるものにや、しりがたし。

穏とはおよそむつかしげなることあるはふることなどとりいれてそれをかどかどしからず、ことばよくとのひてあやうからぬをほむることばなめり。寒を「さむし」といひ、熱を「あつし」といふを穏とするにはあらず。今の世にはさしもなきことをいひて、唯そのことばのなだらかにて耳にさはらぬを穏と名づけてよろづの歌をほむる詞とおもへり。かかる穏の字を的にかけて人に射さする、中むかしの人のひが教へなるべし。この教にしたがふ人の歌はいつにても牛の涎と流るめり。

今の世にやんごとなきあたりの御会に年わかき人のちからをいれていとよき歌になひいだしたらんには、かたへの人かならずおさへていださぬこととなん。*さ

らでは*、年ふり位たかき(経)(高)人々の顔の色のあからびわたらんがいとおしきなるべし。されば、常々にもよから(赤)(渡)(惜)(良)ぬ歌のかの穏にして難もなきをよみならふを秘伝とすめり。かかる世にははじめより歌よまぬぞよき。(詠)(習)(詠)(始)

この外に、女ぶりのかすめ歌*てふものあり。すべてをみなはよはよはとしてものごとたどたどしきをならひとすめり。常のことばつきもただかすかにいひさし、たしかにはいひもさだめずかし。されば、歌よむにも、ことわりあきらかにすがすがしうおさまりたるをおおしき詞とておのが口よりはうちいづべうもあらず。薄雲の月をかくしたらんやうにほのかにいひかすめたるをよしとおもへり。女なればさもあるべきことにこそ。梅花のにほひことに風にさそはれて袂をそむるばかりにて、其木のもとはいづくぞと心まどひするやうなるぞ、かすめ歌のいとすぐれたるなめり。(女)(弱々)(習)(言葉)(言)(確)(定)(言)(理)(明)(詠)(雄々)(出)(隠)(言)(良)(思)(句)(殊)(誘)(染)(優)(惑)

かかるふりは小野小町よりや、はじまりけむ。これより後の女の歌みなしかなりけり。これを女ぶりとてべちのこととて春霞立へだてたるぞいとよかるべき。男歌とてはさらにいふべくもあらず。よのつねのことなれども、かの女ぶりにむかひては男ぶりとも名づけいふべし。このけぢめをよく思ひてさだめたる人は昔よりなかりしにや。ほとほとおのこの歌にもまじりきにけり。『後撰』『拾遺集』よりぞ、この風世を逐て盛に吹すさみぬる。また其中によき歌も多かれど、すべて歌の風は昔にかはりぬ。ただなだらかに花やぎたるのみをよき歌と思ひけらし。相聞の歌などはおのこのよみたるも女むきの歌なれば、かすめたりともけしうはあらじを、よのつねの歌にはいと口おしかるべし。其比にても西行法師一人はこの風にくみたりとみえたり。(別)(隔)(良)(世)(常)(言)(振)(対)(振)(定)(混)(男)(来)(良)(変)(良)(男)(詠)(怪)(世)(常)(惜)(見)(僧)

又、近き世に縁語をにくむてふ歌人はもとこのかすめ歌をさけたるはいとよけれど、世の常の縁語までをあししとてはらひすてたるはいとかたくなしきや。かすめは縁語のひところびころびたるものにて、おのづか(僧)(避)(良)(悪)(払)(捨)(頑)(一転)(転)(自)

ら其けぢめあるべきを、ひたすらにいふべきことかは。縁語をこのむ人はこのむに溺れ、にくむ人はにくむにながれ、中筋なるよきわたり瀬はわたる人ぞすくなき。*

「立わかれいなばの山」*は縁語にてたしかなるおのこ歌なり。「わが身世にふるながめ」*はをんなぶりのかすめ歌なり。このふたつをおしたててもろもろの歌をかうがへば、そのけぢめは誰にてもまぎるるまじきにぞ。ただ女は女ぶりを守るべし。男はこれをさけたるぞよき。

＊以下、手稿本は貼り紙して足す。

心ある人々にはみないへりけるは『新葉集』*こそいとめでたき選なれ。この前のよよの代々の選にははるかにまされりとなん。このことばにはたれもたれもうちなびきてたがふべくもあらぬを、されどまたあたらぬことこそありけれ。歌のすぐれたるとは建武のみかどの御製にこそあなれ。このみかどは英才ましまして、くだれる世の風にそまず、遠く延喜*以上のすがたにたちかへりたまひぬ。されば、これを見奉りたる人は皆きもをけして、「こはすぐれたる集なり」と思ふなり。すぐれたるはこのみかど御一人なめり。その外はみこたちをはじめて、みなくだれる世のすがたなめり。大かたは牛の涎にこそ。されば、御門の御歌のよきのみぞ、集のよきにはあらずかし。

【校異】○よろしき…手稿本、中之島本「よろし」。和文集本は右に「き」を補う。ここでは和文集本に従う。○給…中之島本「ぬ」。○さだめ給ふべけれ…手稿本「さめ給ふべけれ」。和文集本は右に「だ」を補い「さだめ給ふべけれ」にする。中之島本「さめ給ふべければ」。ここでは和文集本に従う。○まされれば…中之島本「まされるは」。○次々に…中之島本「次々には」。○そが…中之島本「その」。○べちに…手稿本では「古今集にて」を見せ消ちにして直す。○くずれて…各本「くずきて」に見えるが、内容から「くずれて」にする。○たて給ひし…中之島本「たてぬひし」。○貴ぶ…和文集本「貴とぶ」。○にくみて…中之島本なし。○をただこと歌…中之島本「をただ」なし。○されど…中之島本「されば」。○いひつたへし…中之島本「いひてこし」。○人々…中之島本「人ら」。○聞…中之島本「きき」。○うとし…中之島本「ことし」。○さらでは…中之島本「さぞては」に見える。○たかき…中之島本「貴き」。○常々にも…中之島本「常ににも」。○常のことば…中之島本「常ののとば」。○袂…和文集本「袖」。

○かすめ歌…中之島本は「かすめ」と「歌」の間に「る」があるが訂正している。○また…中之島本なし。○はらひすてたる…中之島本「はらひまけたる」。○中筋なる…中之島本「中筋なり」。○ぞすくなき…中之島本「うすくなき」。○よよの代々の…和文集本「代々の」を見せ消ちにして「代々の」に直す。○遠く…中之島本「遠くなれ」。

【語釈】○たくらぶれば…くらべれば。

【注】○から歌には「比」…『詩経』の風・雅・頌、賦・比・興を六義という。風・雅・頌は、詩の性質・内容からいい、賦・比・興は詩の表現・修辞の上からいう。賦はその事を直叙するのをいい、比は物に比方していうのをいい、興は事を物に託していうのをいう。六義は『詩経』序に説明があるが、その影響で『古今集』仮名序でも歌を六種に分類している。六義と六種とが対応するという説もあるが、履軒は対応しないと考えていた（『古今二微』「六種微」）。○近ごろの歌よみ…小沢蘆庵らを言うか。○ただこと…直言・徒言。物にたとえず、ありのままに詠むこと。前々注、六種の一つ。○文字の数あまりて心たらず…『古今集』仮名序の在原業平評に「その心あまりて言葉たらず」というのを参照。履軒は、この標語は貶めた言い方だとし、「ことばすくなくして、こころあまりあり」（余韻がある）と直すべきだと言う（『古今二微』「六仙微」）。○題歌には、序枕は用ひがたし…未詳。○もろこしの「思無邪」…『論語』為政篇で、孔子は『詩経』を一言で言うと「思い邪無し」だと言う。「思無邪」は『詩経』魯頌、駉篇に見えるが、そこでは「思」は助字。○七情…『礼記』礼運篇に見える。七情を歌の本質とするこの前後の言葉は履軒の歌に対する考えを端的に表現している。「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、同様の論が見える。○〔題歌には情が見られないとの説〕…「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、同様の論が詳しく見える。○はじめより歌よまぬぞよき…以上、履軒の当時の和歌界に対する痛烈な批判である。○かすめ歌…「かすめ」は、『百首贅々』で「掠め」という字を当てている。履軒は、はっきりせず、遠回しに表現する歌をかすめ歌と呼んでいる。かすめ歌は女の歌としては評価できるが、男の歌では相聞歌以外は認められないと履軒は言う。以下、『百首贅々』に見える用例。九「花の色は…」の歌（小野小町）。「抑女ハ何事ニヨラズナダラカニヤサシキヲ宗トスレバ歌モ只ナダラカニイヒツヾケテ男歌ノ如クヒシ貼トイヒカタメタルヲ嫌フナリ。故事ヲ用ルモサシテソレトモ聞エヌヤウニ少ヅヽ言ヒ掠メテ其意ヲ思ハスルナリ。…サテ小町ハ女歌ノ最上ニテ言ヒ掠メノ元祖ト云ベシ」。＊ここに「歌のすがた」「かすめ歌」の内容がそのまま見える。「言い掠め」という言い方に注目。六〇「いく野ハ往野ヲ掠タルナリ」。七四「初瀬に始テイヒヨル心ヲ掠メタリ…コレハ女流ノ掠メ歌ニナラヒタルナリ」。九六「花さそふ…」の歌。「コレハ言掠メノ甚シキ歌ナリ」。九七「こぬ人を…」の歌。「コレハ我女ニナリテ詠タル歌ナリ。掠タリトモ苦カラズ」。一〇〇「百敷やふるき軒端…」の歌。「コレモ掠メ歌ナリ。ヨキコトニ非。…」。＊…以下、男歌に改めているのが興味深い。○立わかれいなばの山…在原業平「立ち別れいなばの山の峯におふるまつとし聞かば今かへりこむ」（『古今集』三六五）。○わが身世にふるながめ…小野小町「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（『古今集』一一三）。なお、「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、かすめ歌について本書と同様の論が見える。○『新葉集』…「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、『新葉集』について同様の論が見える。「建武のみかど」とは後醍醐天皇のこと。○延喜…九〇一～九二三年。『古今集』のできた時代。

【解説】履軒には『古今二微』という著作もある。『古今集』仮名序の六種と六歌仙について自らの疑問を提示している。六種（そえ歌、かぞえ歌、なずらえ歌、たとえ歌、ただごと歌、祝い歌）については、中国の六義（風賦比興雅頌）とは対応関係はないという説を主張し、六歌仙については、在原業平と小野小町の評価について異議を唱えている。

一八、かすめ歌

＊評論に創作を付す。内容は「歌のすがた」と重なる。かすめ歌については一七「歌のすがた」の注を参照されたい。

中昔より女ぶりのかすめ歌てふものあり。すべて女はよはよはとして物ごとたどたどしきやうなるをならひとはすめり。常のことばつきもただかすかにいひさし＊たるやうにて、たしかにはいひもさだめずかし。されば、歌よむにもことわりあきらかにしかじかといひおさめたるをおおしき詞よとておそれて口よりはいひいだすべうもあらず。ただ薄雲の月をかくしたらんやうに、ほのかにいひかすめたるをよしと思へり。女なればさもあるべきことにこそ。梅の花の＊にほひことに風にさそはれて袖にしむばかりにて、其木の本はいづくぞと心まどひするやうなるはかすめ歌の最上なるべし。

さて、その風は小野小町を祖とやいふべき。この後の女の歌はみなしかなり。これ女ぶりとてべちのことせばいとよからんを、このわかちを思ひさだめたる人、むかしよりなかりしにや、ほとほと＊おのこの歌にもまじりきにける。『新古今集』のころにはこの風盛になりて、まだよき歌も多かれど、すべて歌の風昔にかはりたりや＊。相聞の歌などは女むきの詞なれば、おのこのよみたるも、かすめたりとも、難はなかるべし。よの常の歌にはいとくちおしきや。其ころにても、西行法師一人は是をにくみたりと見えたり。

近き世の縁語をにくむてふ歌人はもとこのかすめ歌をさけたるならん。それはいとよけれど、よの常の縁語までをもあししとするはかたくなしきわざならん。かすめは縁語の一転したるものにて、おのづから其わか

ちあるべきを、これに心つかざりしにや。このむ人は(好)このむにおぼれ(溺)、にくむ人はにくむにながれ(憎)(憎)(流)、中筋なるよきわたり(良)(渡)瀬をさしおきてわたる(渡)人すくなし(少)。「立わかれいなばの松」は縁語にてたしかなる(確)おのこ(男)歌なり。「わが身世にふるながめ」は女のかすめ歌なり。これをおし(推)てもろもろ(諸々)の歌をかうが(考)へば、このわかち(分)は誰にてもよくわかる(分)ることなり。相聞の歌のみは、とまれ、かくまれ。

年比(ころ)*むつまじ(睦)き妹背ありけり。いか(如何)なりけん、男の心軽きことありしにや、たがひ(互)に物いひ(言)かどかどしくなりて、つゐに*おひ(逐)うち(棄)てけり。程へて(経)鄰の刀自*物詣の帰るさに、かの女のがり立より(寄)てとぶら(訪)ひし。さて「いか(如何)にや」と問ければ、女涙おとして(落)、おのが下着の袖をとき(解)て、それに歌かき(書)て「これかの人にとどけ(届)たまはれ」とていだし(出)ける其歌。

出ていにし(去)　なにはのこと(何は・難波)は*　忘れつつ
独(ひとり)　みぬめ(敏馬・見ぬめ)の　浦*にわびぬる(侘)
おとこ(男)此を見て、「われもさこそ」とて、やがてよびか(呼)へし(返)けるとなむ。

【校異】○梅の花の…中之島本「梅の花は」。○かはりたりや…中之島本「かはりたるや」。○つゐに…中之島本「つゐぞ」。各本この後に「し」らしき縦線が見える。○女のがり…和文集本「り」を見せ消ちにし「とに?」に直す。「もとに」と読んでいるか。

【語釈】○いひさしたる…中途半端に言った。○ほとほと…ほとんど。○刀自…主婦。

【注】○なにはのこと…あれはこれはのこと。万事。「なには」は「難波」に掛ける。○みぬめの浦…敏馬の浦。摂津の歌枕。「見ぬ」に掛ける。履軒の恋歌を集めた和歌集『風懐百首』に「わびぬればあふうれしさに年月をみぬめの浦のうらみだにせず」(三八)という歌がある。

＊手稿本、中之島本は以上十八篇のみ。『履軒先生和文集』の「華胥囈語」にはこの後に「百首考」「破腹巻記」の二篇がある。

一九、百首考(『百首贅贅』にも所収)

＊『百人一首』の由来を説く。

百首の巻ばかりことわりがたく疑ひおほきものは世にもあらじ。『明月記』に、「文暦二年中院障子色紙染筆自天智天皇至家隆雅経」といへる一条の外には証とすべきものは露ばかりもなしや。

すべてふるき歌ぬしおほくたがへり。後の歌は歌ぬしはたがはねど、位つかさのかきざまおほく例にしたがはず。歌の文字たがひたるもあり。いづれにも定家卿の筆とおもほえずなん。今の世に伝はりたる小倉色紙にはみな歌ぬしはあらず。たが書そへたるにか。この卿のしろしめしたることにはあらぬにや。

障子の料ならば二十首三十首にてもありぬべきを百首とはいかでさだめけむ。文字のかきざまこの色紙は例にかはりて一もじづつはなれてするするとかきながしたる筆ぞなき。今の世にてをさな子に教ゆる「いろはにほへ」てふによく似たり。かれこれ見そなはすに筆の心ばへ一首づつにかはりて一人の筆とは見えずなんある。また色紙の中には反古をうちかへしてかきたるもあり。いかなれば中院入道のいやいやしく定家卿の筆をねがひてあさましう反古の紙出して歌かせけむ。

またこの歌ども人ひとりづつ其生涯第一の秀歌をゑらび出たるものとはみえず。父俊成卿のおほき秀歌の内をとらで、さしもなき歌をこれにはいれたり。みづからのもかくいひもてゆけば、疑ひのかぎりにこそ。

ある人のいへらく、元亀天正のころ、みやこわたりの兵乱もしづまり、主上も近江より帰りおはします。月卿雲客も国々よりかへりまうできて、世中おだしくなりぬるに、長き旅のすまゐよりのぼり来ませしかば、よろづの調度何くれとゆきあはねば、家々にひめおきたる物どもをおしみもあえずとり出して銭にかへけり。されば、物がたりの草紙、絵の巻物、ふるき色紙など、いとおほく世にいでける。

このころ西京に何がしと聞ゆる伽羅あき人ありけり。かねてはかかるたぐひの物をもものしけるが、めでた

き色紙はよきしろをゑなどして、家とみさかへける。その中にうりゑぬ物こそいとおほくありけれ。それはをさな子の手本とて、その親はらからのかきたる手は、よくまれあしくまれ、をさな子のうつしやすきをぜにしてつぶつぶと書たるなり。見ばえなき物なれば手はよきもあれど、さらに買人なし。かの伽羅あき人はさかしらものにて、これをつねにひめおきて、ひとりゑみしておりける。

其数二三百にもなりぬるころ、いでやとて古へ今の人ごとに唯一首をゑらび出て百首を一箱におさめて「これなん定家卿の小倉山荘にてかきたまひしなり」とてもろ人には見せもやらず、伊勢国司がりいきて「かくなん」とてそそのかしける。国司これをみて大ひにめでさはぎて、「かかる物はこの卿のながれをくむらん人のうへもなき宝なめり。この手の神さびたるさまは、今の世にあるべうもなし」とて、数の宝を出して、たばひけり。かのさかしらはとくつきて帰りぬ。

さて国司はこの百首を一双の屏風におしはりて朝夕ながめおりける。ある日、牡丹花老人とぶらひきて、この屏風を見ておどろきさはぎて、「世の末にかかるた宝からはいづこよりわきいでにけむ。後の世の思ひ出に、いかで一月ばかりもとどまりてよく見ほすことのありてむや」と涙おとしてうらやむめり。「それはやすきほどのことよ。このひとつをかしてむ。君の心ゆくばかり見ほして、今ひとつはとりかへて、またかすべし」とのたまふ。この老人かぎりなくよろこぼひて、かりて帰りぬ。

いくほどもなくて、国司はほろびにけり。其時、この屏風もともに烟と立のぼりにけり。このころまで都にては、さしもしりたるものはなかりしを、こたびたが聞つたへけん、あたら世の宝うせにしとてなげくもあり。または「其半は牡丹花がもとにあり」などいひさはぐを、ことこのむ上達部衛部のつかさなど、我先にもゆきて見る。見る人ごとに一首づつはとりていぬめり。

老人*は涙こぼしておしめ(惜)ども、もとおのが(己)物*にしもあらず、ぬし(主)なき宝なれば、あらそ(争)ふべくもあらずかし。*ひと日(一)ふた日(二)がほどに屏風はむなし(空)くぞなりける。*今の世までつた(伝)はりしはこの色紙にてぞありける。*

国司も老人*も眼のあきらか(明)ならざりしにや、かのさか(賢)しらにぬか(抜)れにけりとなん。*されば、この百首をかき(書)つらね(連)て一巻となして歌ぬし(主)を書そへ(添)たるは、これをうりにいき(行)し時の目録にてぞあるべき。みなかのあき(商)人のさかしら(賢)なればたがひたるはさるべきにや。もも(百)てふ数もかれおぼろげにさだめ(定)けらし。そもそもをさな(幼)子の手本は手ならふ(習)ためにて、歌には*心あらず。されば親はらか(同胞)らのこれをかきて(書)つかはす(遣)に、いやいやしう集なんととり出て(取)かくものにはあらず、ただ何となく耳の底にとどまりたる歌をくちずさみ(口誦)して手に*まかす(任)るものなれば、文字のたがひ(違)たるもあるべし。

かんなの心ゆかざるもおよそ歌の姿すなほにてたけたかく(高)、さらさらとよみくだ(読)して心ゆくやうなるはみなよき(皆)(良)歌にこそ誰が耳にもとどまりけれ(留)。さればこの百首はみなよき(皆)(良)歌なるぞ。そが中にわろ(悪)歌のまじり(混)たるもあれど、それは心こと(言)葉の疵にてこそあなれ。姿はみなよか(皆)*(良)れければ耳にとどまり(留)*けらし。ことさえくからめき(唐)たる歌、くすしめき(薬師)たる歌、かみしものつづ(上下)(続)きおぼつかなくてそらに(空)*はおぼえがたき(覚)(難)やうの歌はひとつ(一)もあらずかし。さればみなよき(皆)(良)歌とぞいふめり(言)。*これぞこの巻のはからざるよき(謀)(良)教へなるべし。また手本なれば、反古をかへして(反)かき(書)もすべし。

かくてもろもろ(諸々)のうたがひ(疑)*は春の氷の日影にあたり(当)(融)たるやうになん、ひたひたとときつき(尽)ぬ。されどかくいひし人(言)は誰としも聞さだめ(定)たることはなし。外に証もなければ疑もて疑ひをことわる(断)にぞ*ありける。まことしかりや(然)、あらずや。

【校異】*以下、すべて『百首贅贅』所収の「百首考」(福島理子翻刻)との校異。
○百首の…「この」。○あらじ…「あらじかし」。○雅経…「雅経卿」。○ふるき…「ふるきは」。○なん…「なむ」。○二十首…「二」。○百首とは

いかで…「いかで百首とは」。○けむ…「けん」。○この色紙は…なし。○筆ぞなき…「筆はなし」。○かれこれ…「これかれ」。○筆…「手」。○見えずなん…「みえずなむ」。○いやいやしく…「いやいやしう」。○ねがひて…「ねがひたるに」。○けむ…「けん」。○またこの…「又かの」。○ゑらび…「選び」。○みえず…「見えず」。○これには…「これに」。○かぎり…「限り」。○ある人の…「ある人」。○おだしく…「おだしう」。○のぼり…「帰り」。○何…「なに」。○けり…「ける」。○いで…「出」。○この…「其」。○西京…「西の京」。○色紙…「色紙など」。○その…「が」。○うり…「売」。○物…「色紙」。○その…「其」。○をさな子…「をさなご」。○つぶつぶ…「つぶらつぶら」。○買人…「買人は」。○古へ…「いにしへ」。○なん…「なむ」。○たまひ…「給ひ」。○そそのかし…「そそのかし聞え」。○さまは…「さま」。○宝…「たから」。○けり…「ける」。○ある日…「ある日みやこより」。○見て…「みて」。○たから…「宝」。○いかで…「あはれ」。○ありてむや…「ありてんや」。○うらやむめり…「うらやめば」。○見ほして…「見ほしてよ」。○今ひとつは…「今ひとつはまた」。○またかす…「まいらす」。○よろこぼひて…「悦ひて」。○いくほども…この前に「この後」あり。○国司は…「国司」。○其…「その」。○この…「ひとつの」。○都…「みやこ」。○けん…「けむ」。○其…「その」。○牡丹花が…「牡丹花の」。○衛部…「衛府」。○先にもゆきて見る…「さきにといきてみるなり」。○見る…「みたる」。○はとりて…「取て」。○老人…「牡丹花」。○物…「もの」。○かし…なし。○なり…「なりに」。○今の世…この前に「ここかしこに」あり。○つたはり…「伝はり」。○あり…「有」。○老人…「牡丹花」。○なん…「なむ」。○たがひたる…「たがひたる事ども」。○歌には…「歌にはさしも」。○朽ちずして手に…「うちずして筆に」。○みな…「皆」。○耳に…「耳には」。○そら…「空」。○ひとつも…「ひとつもこの巻には」。○歌…「歌なり」。○この…なし。○うたがひ…「疑ひ」。○人は…「人を」。○ことは…「ことも」。○外…この前に「また」あり。○疑…「疑ひ」。○にぞ…「こそ」。

【語釈】○月卿雲客…公卿、殿上人のこと。

【注】○『明月記』…藤原定家著の漢文日記。この記述が『百人一首』は定家の撰だという根拠になっている。原文は「予本自不知書文字事。嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切。雖極見苦事憖染筆送之。古来人歌各一首、自天智天皇以来及家隆雅経。」（『明月記』文暦二（一二三五）年五月二十七日条）。意味は「自分は字が下手だが、嵯峨中院の障子の色紙形を書くように、彼の入道（定家の息子、為家の舅である宇都宮頼綱）に懇願され、極めて見苦しいこととは言いながら書き送った。古来の人の和歌を一首ずつ、天智天皇から家隆・雅経に及ぶ。」○ふるき歌ぬしおほくたがへり…冒頭部の、天智天皇、持統天皇、柿本人丸、猿丸の歌などを言う（『百首贅贅』参照）。○さしもなき歌…「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」を言う。○みづからの…「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」を言う。○元亀天正…一五七〇～一五九二年。織田信長、豊臣秀吉の時代。

二〇、破腹巻記

＊破れ腹巻を子孫に遺す理由を書いた記。腹巻とはこの場合、鎧の一種。履軒『刀甲辨』「甲辨」に、鎧を三種に分け、下等のものを腹巻と呼んでい

る。なお、懐徳堂文庫の新田文庫に軸物の「破腹巻之記」がある。

およそ泰平の世に当りて甲冑はまことに無用の物なり。まして、文儒隠淪の流にして禄仕の身にもあらねば、かれはた何の用あらんや。然るにわれ(我)このやぶれ(破)腹巻をたくはへ(蓄)おき(置)て子孫に遺すことは、もとより安くして危を忘れざるの義なれど、またすこし(少)心ばへ*なきにしもあらずかし。

かかるやぶれ(破)腹巻はまさかの時に何の用をかなさんと人みな(皆)思ふべし。是しから(然)ず。およそものの(武士)ふの大切とすべきは初陣なめり。初陣に勇敢なれば、其身一生衆におとる(劣)ほどの不覚はなきものなり。初陣に微漏なれば一生武勇の功は出来ず。すべて初陣に甲冑のゑら(選)びをして、「やぶれ(破)具足は鋒鏑*をふせ(防)がず、あやう(危)し」など思ふ心ばへ*にてはとても出陣はなるものにあらず。出陣したりとも何事をなし(成)ゑ(得)んや。何にても手にふれ(触)たるものを身にまとひ(纏)て飛出る心ならでは武功はなし(成)がたし(難)。戦場は死地なり。死地にゆく(行)にかねて生路を求むべからず。具足よし(良)とても、しぬる(死)命なれば死す。あし(悪)とても、しなぬ(死)命なればしなずして(死)功をあら(顕)はす。千年万年の後兵革*の世にあたり(当)て、わが(我)百世の孫、もし武勇の器ありて出陣せば、このやぶれ(破)腹巻を着て、初陣の功を励むべし。勇敢の気ありとも、戦闘に慣なれぬ者のみだりに先をあらそ(争)ひて、犬死すべからず。しばらく(暫)ひか(控)へて、戦半なるを待て敵味方入みだ(乱)れたる時、鑓を提げてこだか(小高)き処に登りて遠見すべし。大将が物主(ものぬし)*とおぼしくて 年わか(若)く物具きらびやかなる敵あるべし。それを無二無三に突倒し首を取て軍功を顕あらはすべし。あなかしこ、名乗あひ詞戦すべからず。さて其物具を分捕して、やがておのれ(己)が着料とすべし。指物も此敵のを一生用ゆべし。一生の勇怯も毀誉もこの初陣にてトすべし。これものの(武士)ふの心を定むる大切の事なり。わがやぶれ(破)腹巻をのこし(残)おく(置)はこのため(為)なり。まこと(実)はよき(良)物具をあたへ(与)んため(為)なり。もし今よりよき(良)具足を調へお(置)かば、子孫数十代の間には必質屋

の蔵に入べしとぞ思ふ。また前にいへるごとく、このやぶれ腹巻を心もとなく思ふ者ならば即時に主君に暇をこひ在郷にいりて鋤鍬にかへ農民となるべし。武功のことは思ひよるまじきものなり。

右告百世孫

乃遠祖履軒幽人中井朝臣

寛政庚戌仲秋*

【語釈】○心ばえ…事情。○鋒鏑…矛先とやじり。○兵革…戦争。○物主…ものぬし。戦陣での部隊長。

【注】○安くして危を忘れざる…『易経』繫辞下伝に「君子は安くして危を忘れず」とある。○寛政庚戌仲秋…寛政二年(一七九〇)。

【解説】履軒の自意識

履軒は、仕官に応じず一生在野で過ごし、隠逸的境地に対する憧れも表現している(『履軒古風』)。人付き合いを好まぬ偏屈というのが履軒についての一般的評価である。だが、本篇を見れば、武士としての自意識を有し、最後の署名に「朝臣」とあることから貴族に対する憧れも有していたことが伺える(『昔の旅』で自分たち兄弟を文章博士に仮託していることも同様の例と言える)。また、多くの経世論を残していることからも、決して出家人としての行動していた訳ではないことがわかる。なお、履軒には、「刀」と「甲(甲冑)」とについて考証した『刀甲辨』という漢字カナ交じり文の著作もある。

謝辞　本稿の執筆に当たり、大阪大学の飯倉洋一先生、四天王寺国際仏教大学の矢羽野隆男先生、大阪府立工業高等専門学校の井上千鶴子先生にご教示を賜った。ここに記して謝意を表す。

(大阪府立工業高等専門学校助教授)

口絵解説　【博山香炉】(新田文庫所蔵)

中井履軒作と伝えられる楽焼きの香炉(『懐徳堂考』下巻七九頁)。手前の身の部分に香を入れ、富士山形の蓋を被せると、蓋に開けられ穴から煙が立ち上る仕組みになっている。蓋の大きさは、縦16・5㎝、横26㎝、高さ10㎝。博山とは富士山のことだが、古来、中国人が憧れた仙山を指すとされる(一一「夢路草枕」参照)。

中井履軒は、安永四年(一七八一)、米屋町に引っ越し、居宅を華胥国と名づけた(三「華胥国記」参照)。華胥国とは『列子』黄帝篇に見える夢の中での理想国である。この夢の世界で、仙山に見立てた香炉を燻らせながら、履軒幽人は何を考えたのであろうか。